

---

# バカと昼寝男と超能力

red star

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと寝男と超能力

### 【Zコード】

Z6750V

### 【作者名】

red star

### 【あらすじ】

「よいよ学園祭！ 文月学園ならではの試験召喚大会も催される。劣悪な環境と超頭の悪いクラスに絶望した瑞希の父親が、なんと娘に転校を勧めている」と明久は美波から打ち明けられる。  
『バカとテストと召喚獣』の文月学園に、『とある魔術の禁書目録』の

の

キャラが、『伝説の勇者の伝説』のキャラが、やって来た！！

明久達の学園生活はどうなる…？

一応原作に則ります。途中からブレイクすると思いますが…。

途中からオリキャラも参戦！（オリキャラはチートです）

## 嵐の前の静けさ

今日のFクラスは騒がしかつた。

なぜなら、転校生が何十人と来るからだ。

実は、なんとか山が噴火したせいで、火山灰やら、何やらが大変なことになつて

なんとか山周辺の高校が『生徒の安全が第一』とか言い出したので一時的な転校をする生徒が、ここ、文月学園にも、何十人か来ることになつたのだ。

説明が雑ですがすいません。元ネタはバカテス、伝勇伝、禁書目録です。

「なあ雄二」、どんな人が来ると思つ?」

「わかんねー、でも、やっぱり女子が良いに決まつて!」

「雄二、後ろ後ろ。」

「んあ?つて!/?翔子!/?おまえいつからそこに痛たたたたた!/?」

「……浮気は許さない」

今、雄二にアイアンクローラーをしているのは霧島翔子さん。  
ちなみに霧島さんは、Aクラス、つまり他クラスで、しかも学年主席だ。

そして、霧島さんの許婚の…

「誰がこいつのいいなず…ぐわああーーー!?」

「……雄二、素直になつて」

「ぐわあああーーー!?まで!まで、翔子!」

ゴホンツ、失礼、今、アイアンクローラーを、極められているのが、坂本雄二だ。

で、僕が吉井明久です。ちなみに天才です。

「何が天才よ！！れつきとしたバカじやない！！」

「失礼な！！僕はバカじやない！」

今、失礼なことを言つたのが、通称ペッたんこの・・

一  
つ  
て  
！  
？  
痛  
い  
痛  
い  
！  
？  
美  
波  
！  
？  
そ  
の  
関  
節  
は  
そ  
っ  
ち  
に  
曲  
が  
ら  
な  
・

・ も や あ あ ー ー ー ! ? 「

「アキ？ 地の文をわたしにまかせるか、隣節をひとつ壊やすか、

「まかせます！まかせます

- 14 -

和田義満です。今からおに髪舟に基本的な二点、川口で

「はうー!? ど、どうしたんですか? 美波ちゃん? ? なんか殺氣がで

「アラカルト」――?」

「阿内、こいつらの用心棒だ。」

呆れたように言つたのは木下秀吉、外見は超絶美少女だけど、戸籍上は男。

ぞ！？

「.....違つ、秀吉の性別は秀吉」

そこ吸いたのはソラツリヒニこと土屋康太だ

「……………」わしは男じゃと言ふておるのは……

そんな平和?な会話が交わされているとき、

「おい、お前ら席に着けー」

野太い声でそう言ったのは『鉄人』こと西村先生だ。

霧島さんはいつの間にかAクラスに戻っていた

「知つてゐると思うが、今日は転校生がくる、仲良くするよ」

「それじゃあ、入つてこ」

ぞろぞろと転校生が入つてくる。

「右から順番に自己紹介してくれ」

いちばん右の女が自己紹介を始めた。

その女は、すごく綺麗だった。整いすぎている田鼻立ち、スタイル抜群の体

さらさらしてそうな金髪、何もかもが完璧に見えた。だが、その女は無表情だった。

その瞳は感情を映していないかった。

「名前はフエリス・エリス、趣味はだんごを食べること、以上だ」

驚くほど簡潔で簡単で殺伐とした自己紹介を終えると、次は男だ、寝癖全開の頭に猫背の長身瘦躯、

眠そうな、それでいて優しそうな目をしている。

「あー、ライナ・リュートだ、趣味は寝ること、特技は歩きながら寝ること、よろしく」

だるそうな感じで欠伸をする。

「ふわああ・・・まだダメだ・・・めひやめひや寝こ」

次も男、ツンツン頭で背が高い方であろう。

「上条当麻だ、基本的に勉強は嫌い、よろしく」

好青年っぽい顔で、微笑む。

また男、金髪のツンツン頭でなぜかグラサンをかけている

「土御門元春だにゃー。よろしく」

白い歯を見せて笑う。

次は女、肩に届くくらいの茶色い髪、勝気つぽい目。

「御坂美琴です、よろしく」

できるだけ優しく見えるように微笑む。すると、周りから、

「　「　「おおお————！」」

と歓声が上がった。

「なになに！？なんなのこのノリ！？」

「御坂さん！？俺と付き合つてください！？」

「いや、俺と付き合つてください！」

「俺はフェリスさんと、『』ばあ！？」

フェリスを狙つたFクラスの男は本人の手によつて卓袱台に沈められた。

そこで、土御門が、

「みんな、だめだぜえ。御坂には先約がいる。」

「だれだ！？そんな羨ましい奴は！？」

土御門が勿体ぶつて、名前を言つ。

「それはなあ……」

ニヤリと笑つた後に上条の方に指を向け、

「カミayan、もとい、上条当麻だぜい！？」

須川が席を立つた。クラス全体を見渡し、

「HRの後すぐに『異端審問会』を開く！？『紐なしバンジー』の

準備を！」

クラスの男子が声を揃える

「　「　「はつ！？」」

「黙れえ！？」

鉄人が、場を鎮めるために怒鳴つた

「まだ、一人いるんだ！！静かにしろ！」

「失礼した。続けてくれ。」

最後の男が小さく呟く

「神童に、左腕さわんの侍、絶影ぜつえいの忍者、馬鹿うましかの友、よく揃つたもンだ」

「何か言つたか？」

「イイや、なんでもねえよ」

男が口を開く、

白い髪に赤い瞳、お世辞でも学生服が似合つているとは言えない風貌。

「一方通行アカセラレータだ」

そう言つてから口端を吊り上げ、口が裂けたような邪悪な笑みを浮かべ、こつ言つた。

「よろしくなア」

それなりに頑張りました。処女作です。  
文オゼロなので申し訳ないですが、アドバイスお願いします。  
多少のミスは見逃してくれる有り難いです。

## それぞれの思惑

Fクラスの代表である雄一は床に『じざわ』を敷いて座る僕らを見降ろしながらこんな宣言をしてきた。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」「とりあえず」と、言葉を切る。

「議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の雄一。

さてはあの野郎、興味が無いからって全部人に押し付けて寝るつもりだな?

試合戦争の時とは全然違う態度だ。

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか?」「小声で僕に話しかけてきたのは、クラスメイトの姫路瑞希さんだ。今日も綺麗な笑顔と大きな胸が眩しい。

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているつてことはなさそうだね」

雄一は興味のあることは、自分からやる奴だ。  
正真正銘、興味が無いのだろう。

「なんですか……寂しいです……」

「吉井君も興味がないですか?」

少しだけ上目遣いで僕の顔を覗き込んでくる姫路さん。か、可愛い

(のぞ)

.....。

「うーん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいってわけでもないしなあ」

「これは僕の正直な気持ちだ。授業が潰れるのは純粹に嬉しいけど、学園祭でこれをやりたい、といつ目的のようなものはない。

「私は……吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」「ほえ？」

彼女の意味深な台詞に、思わず間抜けな声が出てしまう。

「その、吉井君は知っていますか……？」

と、姫路さんが聞いてくる。

「うちの学園祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいって噂がケホケホッ」

と、姫路さんが急に口元に手を当てて咳<sup>せき</sup>をし始めた。顔も少し赤か<sup>かげ</sup>つたし  
しまう。

「大丈夫？」

「は、はい。すいません……」

ちょっと苦しかったのか、若干目<sup>じやつかん</sup>が潤んでいた。

教室の端では一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が座っていた

「ちっ、どうすんだ？」

誰にも聞こえないような声で呟く。

『問題無いですよ』

優しそうな声が一方通行の頭の中に直接響いてくる。

「どういってんだア？」

『だつて、馬鹿の友が解決しますから』

一方通行はニヤリと笑う、そして、問う。

「それは信頼かア？」

『いいえ、あくまでも信用ですか』

「んじゃ、学園祭実行委員は島田といふこといいか？」

不意に耳に飛び込んできた雄一の台詞で今の状況を思い出す。

そう言えば学園祭についての話しあいをしてるんだった。

「え？ ウチがやるの？ うーん……、ウチは召喚大会上に出るから、ちょっと困るかな」

「雄一。実行委員なら、美波より姫路さんが方がいづれ役は合つてるんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

話題を振られて姫路さんが小首を傾げる。

気の強い美波よりも優しい姫路さんが、話しあいが荒れないで済むと思つ。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてくるつもりでタームアップになる」

眠たげに返事をする我らがクラス代表。  
そう言われてみると、確かに雄一の言うとおりだ。きっと姫路さんは少数派の意見を切り捨てたりはできないだろう。普段であれば美点なんだけど、『うう』た時はそれが逆に仇になってしまいそうだ。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

小さな手をぎゅっと握り締める姫路さん。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。一人とも物好きだなあ」

僕らの通うこの文月学園には、世界的にも注目されている『試験召喚システム』というものがある。今年はその注目されているシステムを世間に公開する場として、清涼祭の期間中に『試験召喚大会』という企画が催されるらしい。僕は全く興味が無いけど。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言つてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ」

「…………」

「ごめん。皆をよく知っている僕でも、Fクラスはバカの集まりだと思つ。」

「だから『クラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの  
鼻をあかそつてワケ」

「だから、ウチはできないの。」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだ  
ろ？」

美波はボロボロの黒板に決選投票候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

あ、やつぱり僕だ。

『候補？……明久』

あ、これも僕だ。

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄一。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

『どうする？ どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……』

「こらあつ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！ あと、  
平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズ  
だ！」

まったく、このクラスのモラルはどうなっているんだか。

「ほらほら、アキつてば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まつたんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ

……

「何やるか、決めましょ」

つてわけで挙がった候補は、

【候補？】写真館『秘密の覗き部屋』

【候補？】ウエディング喫茶『人生の墓場』

【候補？】中華喫茶『ヨーロピアン』

まあ、色々あって、結局は候補？になつた。  
もちろん、姫路さんはホールだ。

「で、一応俺らは召喚大会に出ることになつたんだよな」と、いつたのは上条当麻だ

「そうよ、もちろん超能力付きでね」

と言つたのは御坂美琴だ。

「そうしないと御坂とカミやんと一方通行は勝てないぜい」アクセラレータ

「ちつ、めんどくせーな」

「ちなみに点数の確認だけど、カミやん

「なんだ？」

「カミやんつて国語得意だつたよな？」

「ああ、国語だけは、181点だ。他は50～90点だけどな」

「まあそんなもんでもカミやんは勝てるからな」

「土御門は？」

「ひみつだニヤー」

「他の一人は心配いらないな」

「ここで上条が、

「あつちとも確認しないとな。シナリオが変わるとまずいんだろ?」

そこで一方通行アキセラレータが、

「ちつ、逆だバカが、オレ達がシナリオを変えにきたンだよ」

「ただ、一応むこうと確認した方がいいかもしれないわね」と御坂が言つ

「だつて、どこで負けるかとか覚えとかなきや、知らぬ間に優勝とかしてたら困るでしょ」

そういうつてライナの方へ歩いて行つた。

「まあ、とりあえず、問題はフェリス、お前だ!..」

「むつ、わたしが問題なのか?」

「ああ!お前が問題だ!」

そうなのだ。フェリスは点数が非常に微妙なのだ。  
総合教科が1935点なのだ。

いや、Dクラスの代表からCクラスの中堅くらいの強さなのだが、パートナーが総合教科が4059点といつ異常な点数なのでどうしても見劣りしてしまひ。

「まあ、対戦表の運がいいことを願うか・・・」

『やあ、僕の計画を崩すような歪みが現れることを願いますかね』

## 揃った欠片

「先生！ 覗きです！ 变態です！」

今、僕たちは秀吉のお姉さんにそんな事を言われてしまった  
「逃げるぞ明久！」

「了解つ！」

なぜこんなことになってしまったと嘆息つと・・・

- - - - - 数十分前に遡る - - - - -

「アキ、ちよつといい？」

帰りのH.R.<sup>ホームルーム</sup>も終わつて放課後。特に予定も無いので帰らうとしたところ、美波に呼び止められた。

「ん、何か用？」

「用つて言つが、相談なんだけど」

「相談？ 僕で良ければ聞かせてもらつけど」

「うん。ありがと。多分、アキが言うのが一番だと思うんだけど  
その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」  
どうやら美波はFクラスの喫茶店の成功には雄一の先導が不可欠だと判断したようだ。ムキになつて自分でなんとかしようとしている  
たり、賢明な子なのかもしれない。

「うーん、それは難しいなあ……。」  
と言つてから、

「さつきも言つたけど、雄一は興味の無い事には徹底的に無関心だ

からね

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね？」

美波の何かを期待したような眼差し。

「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないこと思つけど」

「つうん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だつて」

「そりや確かに、よくつるんでいるけど、だからと黙つて別に」「だつてアンタたち、愛し合つてるんじょ！」

「もう僕お婿むこにいけないっ！」

どうして真顔でそんな台詞が出てくるんだろ？

「誰が雄二なんかと！ だつたら僕は、断然、秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

と、偶然近くにいた秀吉の動きが止まる。あれ？ なんだか妙なことになつてない？

「そ、その、お主ぬしの気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシリには色々と障害があると思うのじや。その、ホラ。歳の差とか……」

「ひ、秀吉！ 違つんだ！ もの凄い誤解だよ！ さつきのはただの言葉のアヤで！ それと、僕らの間にある障害は決して歳の差じゃないと思う！」

秀吉が顔を赤らめて俯くつぐ。び、びつこひつー。秀吉ならいいかも、つて思えてきた！

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

「なんとかできないの？ このままじや喫茶店が失敗に終わるよつ

な……」

少し深刻そうに顔がつむいた。

「ところで、おぬしらは何の話をしてもるのじや？ そんなに思い

つめた顔をすると、随分と深刻な話のようじゃが

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の

話で

「

「アキ、そういうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」

「実は、瑞希なんだけど」

「あの子、転校するかもしれないの」

「美波！ 姫路さんが転校つて、どうこうことやー。」

「どうもこりも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしないの」

「このままだと……？」

秀吉が小首を傾げる。

「瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なの

「つてコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて

「そうね。純粋に設備の問題つてことになるわ」

そう言われて、僕は思わず納得してしまった。

姫路さんにこのFクラスの設備は相応しくない。

「それに瑞希は、身体も弱いから……」

「そうだよね。それが一番マズいよね……」

「…………アキはその…………瑞希が転校したりとか、嫌だよね…………？」

美波が探るような目でこちらを見てくる。

僕がそんなに冷たい人間に見えるんだろうか。それは心外だ。

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

家庭の事情でどうしようもないならともかく、こんな理由で仲間が離れていくなんて絶対に嫌だ。

「そつか……。うん、アンタはそうだよね！」

美波が嬉しそうに頷く。

ちなみに雄一だったからどうでもいいといつのは秘密だ。

「そういうことなら、なんとしても雄一を焚き付けてやるさー。」

「そうじやな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙つておれん

「それじゃ、まずは雄一に連絡を取らないとね」

ポケットから携帯を取り出して、雄一の番号を呼び出す。教室の中にヤツの姿は見当たらぬけど鞄かばんはあるみたいだし、学校内

のどこかにはいるはずだ。

『ｐｅｒｒｅｒと、呼び出し音が受話器から響く。

『もしもし』

「あ、雄一。ちょっと話が

『明久か。丁度良かつた。悪いが俺の鞄を後で届けに

『げつ！

『翔子！』

「え？ 雄一。今何をしてるの？」

『くそつ！ 見つかっちゃった！ とにかく、鞄を頼んだぞ！』

『雄一！？ もしもし！ もしもーし！』

携帯電話からはブー、ブー、という無機質な音しか返つてこない。

『坂本はなんて言つてた？』

『えつと、『見つかっちゃった』とか『鞄を頼む』とか言つてた』

『……なにそれ？』

『こじで、

『ちょっと二人とも協力してくれるかな？』

『それはいいけど……坂本の居場所はわかっているの？』

『大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄一だけじゃない』

『何か考えがあるようじやな』

『まあね』

『やりと笑つて、僕は一人を連れて教室をあとにした。

そして、

「やあ 雄一。奇遇だね」

部屋の物陰ものかげで大きな身体を小さくしている雄一に話しかける。

「……どういう偶然があれば女子一更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

「やだな。ただの偶然だよ」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが

ガチャツ

音を立ててドアが開くと、その向こうには体操服姿の女子の姿があつた。

「えーっと……あれ？ Fクラスの問題児コンビ？」、「女子更衣室だよね？」

「やあ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じやないか」

「あ、うん。奇遇だね」

あつはつは、と爽やかに笑つてみせる。「うんうん。偶然偶然。

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

「逃げるぞ明久！」

「了解つ！」

更衣室の小さな窓から表に飛び出す。やつぱり「まかせなかつたか！」

と、言つことだ

『吉井と坂本だと！？ またアイツらかつ！』

「雄一、マズい！ 鉄人の声だ！」

「とにかく走れ！」

上靴だけど、構わず外を突つ走る。相手は鉄人。捕まつたら最後だ。

「見つけたぞ！二人とも逃がすか！」

後方から野太い声が近付いてくる。くそつ！もう追いついてきたか！

「明久！」

隣を走る雄一の声。その視線は、前方の新校舎一階にある開け放あはなたれた窓に向いていた。あそこから校舎内に逃げ込もうつてワケか。

「オーケー！」

雄一からの合図を受け、走りながら上着を脱ぐ。そして、その間に雄一が僕より先行する。

「そつちは行き止まりだ！観会かんねんして指導を受ける！」

「行け、明久！」

先行していた雄一が立ち止まつてこちらを向く。

「あいよつ！」

雄一が手を組んで作った踏み台に足をかけ、一気に飛び上がる。その瞬間に雄一が勢いよく腕を跳ね上げてくれたので、僕はなんなく開いている一階の窓に飛びつくことができた。

「くつ！このバカども！こいついう時だけ無駄に運動神経を発揮するとは！」

舌打ちでもしそうな雰囲気の鉄人をよそに、校舎の中に入った僕は脱いでおいた制服を窓から垂らす。

「あらよつと！」

今度は雄一が壁を蹴つて飛び、空中で僕の制服を掴んだ。

「よいしょおつ！」

その隙間に一本釣り。

ビツと制服から嫌な音しがながしたけど

僕らは無事に校舎内に侵入しんにゅうすることができた。

『吉井！坂本！明日は逃がさんぞ！』

流石の鉄人も独力で二階までは来れないよつて、悔しそうな遠吠えが響いてきた。

「はあ……。また要らない悪評が増えていく……」

僕達はFクラスに戻り、雄一に姫路さんの転校の話を聞かせた。

「そうか。姫路の転校か……」

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな  
オンボロの教室内を見渡して雄一が告げる。

「不十分？ どうして？」

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つ

と、雄一が言つた。

「まず一つ目。『やせとみかん箱』という貧相な設備。快適な学習環境  
ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したら利益でなんとか  
できるだろ？」

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境とい  
う面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教  
室自体の改修となると、学校側の協力が不可欠だ」

そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない学習環境という面だ」

部活動とかでもそただけど、能力を伸ばす為には実力の近い競争  
相手の存在が重要になる。Fクラスにいる限り、そんな競争相手は  
望むべくもない。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじやな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しい  
の」「

「それでもなこさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練つてい  
るんだるつ？」「

雄一が美波に視線を送る。

「この前、瑞希に頼まれちゃつたからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だっただけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるじゃらうし、一石二鳥じゃな」

秀吉がうんうんと頷く。僕らの教室は古くて汚い旧校舎にあるから、この宣伝の効果は決して小さくないはずだ。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどうするの？」

「二つ目の問題、教室の改修。これは僕らだけでは難しい。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

さも当然、と言わんばかりの雄一の態度。

「それだけ？ 僕らが学園長に言つたぐらいで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

もしそれで何とかなるなら、二つの問題は全て解決する見込みがあるということだ。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

美波の声援を受け、僕と雄一は学園長室を目指して教室を後にして、

「今日は学園長にお話があつて来ました」

学園長の前に立ち、雄一が話を切り出す。意外だ。敬語を知つていたのか。

失礼しました。俺は一年F組代表の坂本雄一。それでこいつが、  
雄一が僕を示し、紹介する。

「一年生を代表するバカです」

べつじて「コイツは普通に名前を言えないのだろう。

「ほ……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」「ちよっと待つて学園長！ 僕はまだ名前を言つてませんよね！？」

さつきの紹介で僕の名前が連想されたという事実に涙が出そうだ。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじやないか」

まるで映画の悪役のように口の端を吊り上げる学園長。

これで人を教育しようというのだから不思議だ。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があつたらさつと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにも驚かされる。こんなにも口汚く罵倒されているのに、雄二の態度や言動は落ち着いたままだなんて。コイツがここまで大人なヤツだとは思わなかつた。

「Fクラスの設備について改善を要求しました」

「そうかい。それは暇そつて羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれなりともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調の中に危険な言葉がちりばめられている。これは雄二も相当キレてるなあ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、というワケです」

うん。やっぱり僕の知ってるこつもの雄二だ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨てて」よう

「……明久。もう少し態度には気を遣え「

はっ!? つい本音が!

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい?」

学園長が呆れ顔で僕らを見る。僕らが何かおかしなことでも言つただろうか?

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども

「と、いつもなら言つているんだけどね」

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗つてやろうじゃないか」

「清涼祭で行われる召喚大会は知つてるかい?」

「ええ、まあ

「じゃ、その優勝商品は知つてるかい?」

「え? 優勝賞品?」

「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』しづがね副賞には『如月ハイランド プレオーブンプレミアムペアチケット』トクトクが用意してあるのさ」

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作りうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね

「? それのどこが悪い噂なんです? 良い話じゃないですか」

「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来

たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」「

「そのカップルを出す候補が、我が

「うう。うちの学校は可取ヽ集ヽ前ヽ三ヽ試験召喚ヽ

「…くそ…うちの学校は何故か美人捕したし  
試験召喚システムと  
いう話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジンクス  
としては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然つてこ  
とか」

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまず悔しげに唇を噛む雄」。なんだかさつきから様子がおかしいな?

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようつて計画が氣に入らないのか？」

本当に生徒を可愛いと思っているのかは疑問だが。

## 二、被扶養人扶養條件のは

それができるなら 教室の改修へりこしてやねばじやなこか

「わかりました。」の話、引き受けます」

— そ う か い。  
そ れ な ら 交 渉 成 立 だ ね。」

学園長は『計画通り』といった顔をして、やりと笑った。

גָּמְנִי תְּבִיבָה אֶלְעָזָר בֶּן־בָּנָי

話もまとまつたし、教室に戻ろつと思つたといひで雄一が学園長

卷之三

「召喚大会は一対一のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一

「い」と「た」は、ともに進めていくと聞いて、回戻か数学だと、回戻は化学

「対戦表が決まつたら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」  
そう告げる雄一は、何故か学園長の反応を試してくるかのように鋭

い田つきをしていた。何か気になることでもあったのだろうか？  
「ふむ……。いいだろ？ 点数の水増しどうたら一蹴していた  
けど、それくらいなら協力しようつじやないか」

「……ありがとうございます」

ついで、文月学園最低コンビが誕生することになった。

----- 雄二と明久が出て行つた後の学園長室 -----

「嫌なやつだね」

と、学園長が話しかける。

『あれつ？ ばれちゃつてました？』

誰もいないはずだった空間に一人の青年がいた。

『解つてくれました？ 神童の実力が』

「あれでもまだ 神童 としての記憶が入つてないんだろ？」

『はい、その通りです』

「ただ、 馬鹿の友 <sup>（ハマシカ）</sup> に関しては、解らないね」

『何ですか？』

「どんな実力を隠しているのか、だよ」

「まあ、私ごときがオカルトを知るうとするのが間違いなのかもし  
れないけどね」

『ははは、そんなことはありませんよ。』

「それよりあんた、 墮ちた勇者 を連れて來たね」

「 悪魔 と引き合わせられたのかい？」

『今、引き合わせてる途中ですから』

「まったく 墮ちた勇者 をあんな若い子に… 銀髪のイケメンだつ  
たじゃないか」

『まさか！？ シ、シオンさんに欲情した！？』

「1Jの歳で欲情してたら異常だよ……」

『とこりでまだ、僕は2・Fにいますよね?』

「あなたの願いを突っぱねるほど、わたしはモーロクしちゃいない

『僕に惚れてたんですか!?』

「もう、疲れてきたさね」

一度大きく息を吸つて、少し大きめの声で学園長が言ひ。

「あたしは、あなたを恐れてるんだよ」

『あはは、それは初耳です』

そう言ってから、

『いつまでも1Jに居るわけにはさせんし、お暇<sup>レヒサ</sup>させていただ

きます』

言い終わらない内に青年は消えていた。

男が去つた後、今度1Jで、だれもいない空間に向かつて呟いた。

「嫌なやつだね」

アドバイスをよろしくお願ひします

## 波乱のトーナメント

清涼祭 初日の朝。

僕らの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内のいたるところに設置されているテーブル。

実はこれ、僕らの教室にあつたみかん箱だつたりする。

巧く積み重ねて小綺麗なクロスをかけることで、汚い箱は立派なテーブルに变身していた。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

尊敬の目で秀吉を見ている姫路さん。

そつか。このクロス、演劇部で使っている小道具か。道理で良い生地だと思った。

「ま、見かけはそれなりのものになつたがの。その分、クロスを捲ぐるところの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲る。すると、その下には見慣れた汚い箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

美波が僕の隣から覗き込んでくる。

確かに彼女の言うとおりだ。

こんなみすぼらしいみかん箱を見られたら、イメージダウンは免れない。

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるぞ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きっと」

そんなことをやるヤツがいるとしたら、営業妨害が目的としか思えない。

「室内の装飾も綺麗だし、これなりまくいくよね?」

学園祭のレベルとしては充分過ぎるほど完成度だ。これならお密さんも沢山来てくれるだろ?」

「ふわあ、どう~学園祭の準備は進んでる?..」

床で寝ていたライナが目を覚ます。

「「「「お前は仕事しちよーー..」」」

よし、息が揃つたな。

「やつだぞライナ、ちゃんと仕事をしろ。私も頑張っているんだ」  
そう言ったフヨリスは、『』を敷いてお茶をすすつていた。

「いや、おまえもやれよ!」

「ん? お前は『美人はなにをしてもいい』という謠うわさを知らないのか?」

「ねえよ!! そんな謠!!」

「つか、みんな騙されてんだよ。こんな性格崩壊女めのが・・・」

「ん、誰の性格が崩壊してるって?」

「冗談です、冗談なんでその首元に突き付けていただの」の串を降ろしてくれませんか?」

ライナは冗談じゃない命の危機を回避するために命懸けをしていた。

「.....飲茶も完璧ヤムチャ」

「おわつ」

いきなり後ろから響くムツツリーの声。

いつもながら存在感を消すのが巧い。

別に常日頃はそんなことをしなくてもいいと思つんだけどな。

「ムツツリー、厨房の方もオーケー？」

「…………味見用」

そう言ってムツツリーが差し出したのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた

「わあ…………。美味しそう…………」

「土屋、これウチらが食べちゃつていの？」

「…………（「クリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」と、大絶賛。やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、三人とも。

「お茶も美味しいです。幸せ…………」

「本当ね～…………」

姫路さんと美波の目がトロンと垂れる。トリップ状態だ。そんなに美味しいんだろうか？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「…………（「クククク）」

ムツツリーが残った一つを僕に差し出す。

楊枝がないので、手でつまんで軽く一口だけ頬張つてみた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても んゴパつ」

僕の口からありえない音が出た。そして田に映るのは僕の一六年間の人生の軌跡

「ああ、あの頃は良かつたなあ……って、これは走馬灯じゃないか！」

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

「…………（グイグイ！）」

「む、ムツツリーニ！ どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？ 無理だよー 食べられないよー！」  
ムツツリーニが団子の残り半分を僕の口に押し付けてくる。

これは走馬灯のことのできる特殊な飲茶だ！ 一般人は決して口にしちゃいけない！

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄一が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして、躊躇<sup>ためら</sup>いなく僕の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「…………たいした男じや」

「雄一。キミは今、最高に輝いてるよ」

「？ お前らが何を言つているのかわからんが……。ふむふむ。表面は「ゴリゴリ」でありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎずの味わいがつても んゴパつ」

あ、なんか既視感。<sup>デジャブ</sup>

「あー、雄一。とつても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄一に対しても『これは姫路さんの料理だよ。まさ

か酷いことなんて言わないよね?』と田で訴える。田が合つてないから伝わったのか不安だけだ。

「ふつ。何の問題も無い」

床に突つ伏したままで、雄一が道草をしてきた。

「あの川を渡ればいいんだうつ?」

それはきっと三途の川だ。

「ゆ、雄一! その川はダメだ! 渡つたら戻れなくなっちゃう…」まさかあの一口で致命傷ちめいじょうだつたなんて。姫路さんの手料理相変わらず恐ろしいキレ味だ。

「え? あれ? 坂本君はどうかしたんですか?」

きちんととした方の胡麻団子で夢見心地になつていた姫路さんがよつやくこっちの様子に気が付く。見られていなくて良かつた。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫?」

美波も今までトリップしてたのか。

これはもしかすると、失敗していない方の胡麻団子はかなりイケてるのかもしれない。

売り上げへの期待大だ。

「大丈夫だよ、ちょっと足が攢つつただけみたいだから。おーい、ゆーじー、おきるー」

とりあえず、おどけた口調で雄一を起こす仕草をしてみる。

ただし、手は必死に心臓マッサージをしながら。こうなると生死は五分五分いぶいぶだ……!

「六万だと? バカを言え。普通わた渡し賃ちんは六文ろくもんと相場が決まって

はつ!?

よしつ、蘇生そせい成功。こつして、人知れず尊い命がまた一つ救われたのです。

「雄一、足が攢つたんだよね?」

すかさず余計なことを言い出す前に置たたみ掛ける。

今回はアイコンタクトの余裕もない。

「足が攢つた? バカを言うな! あれは明らかにあの団子の」

(「……もう一つ食わせるぞ」)

「足が攣つたんだ。運動不足だからな」

雄一が頭の良い奴で本当に良かつた。流石の僕でもクラスメイト

を殺すのは忍びない。

(……明久、いつかキサマを殺す)

(……上等だ。殺<sup>や</sup>られる前に殺<sup>や</sup>つてやる)

笑顔を貼り付けて小声のやり取り。こんな僕らは仲良し一人組。

「ふーん。坂本つてよく足が攣るのね？」

マズいな。以前と同じような状況を美波が怪んでる。

「ほら、雄一つて余計な脂肪がついてないでしよう？ そういう身体つて、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあつ！」

「……俺が手を下すまでもなかつたな」

美波の拳を受けた僕に、雄一が哀れみの視線を送つてくる。

なんだか最近こんなのがばっかりだ……。

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「バツチリじや」

「…………お茶と飲茶も大丈夫」

本当に大丈夫と言えるんだろうか？

姫路さん製の飲茶が混ざつていなか、一抹の不安がよぎるんだけど。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーに任せる。俺は明日と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

そう言って秀吉とムツツリーの肩を叩く。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

確認するように僕を見る美波。

「え？ あ、うん。色々あつてね」

「もしかして、賞品が目的とか……？」

美波の探るような視線が刺さる。

「うーん。一応そういうことになるかな」

詳しく言つと賞品と設備の交換が目的だけね。

そう言えば白金の腕輪つてのも賞品みたいだけど、あれも交換するのかな？

噂によると召喚獣を一体同時に喚び出せるタイプと

先生の代わりに立会人になれるタイプの腕輪があるとか。

特別欲しいわけじゃないけど、貰えるなら貰つておきたい。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

美波の目がスッと細くなつた。「……これは……攻撃色！？」

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつと思つていたんですか？」

気が付けば姫路さんまで戦闘モード。

「だ、誰と行くつて言われても……」

きつと二人が言つているのはペアチケットのことだろう。

困つた。誰と行くも何も、学園長に渡すだけなんだから。  
でも、約束したから正直には言えないし……。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

答えに詰まつていると、すかさず雄一のフォローが入つた。  
それを聞いて目を丸くしている美波。ふふっ。驚くのも無理はな

い。

「え？ 坂本とペアチケットで、『幸せになりに行くの……？』なぜなら、僕自身ですら驚きの新事実なのだから。つてバカあつ！ 誰が雄一と幸せになりに行くんだよ！ これは物凄い誤解だよ！」

雄二から小声のメッセージが届く。

これ以上ないほど不本意だけど、これも姫路さんの為。

雄一も同性愛疑惑を我慢するみたいだし、ここには僕もグッと堪えて

……  
「俺は何度も断つているんだがな」

「え？ 何？ 裏切り？」

「アキ。アンタやつぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちょっと待つて！ その『やつぱり』って言葉は凄く引っかかる！ それと秀吉！ 少しでも寂しそうな表情をしないでよー！」

マズい。このままだと間違った情報が流れで、

同性愛の似合いそうな生徒ランキングがまた上がってしまう！

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労はしないさ」

「雄一、もつともらしくそんなことを言わないで！ 全然フオローになつてないから！」

「コイツとはいつか決着をつけねばなるまい。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「…………くっ！ と、とにかく、誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞のように弁明し、僕と雄一は教室を後にして

した。

「もうそろそろ行こうぜ、フリス  
ん、そうだな」

「オイ、時間だ土御門、行くぞ  
「おっ、もうそんな時間かにゃー」

「さて、いきましょ

「あ、そうだな」

『ちょっと観戦しますか

そして、

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスタして全力を  
出してください」

今回立会人を務めるのは数学の木内先生。木内の先生当然勝負科目は数学となる。

「瑞希、絶対勝つわよ！（大丈夫、相手は同じFクラス、数学な  
「初戦が同じクラスか、こりや勝つていいのかア？土御門」「  
問題無いにゃー、って事で思つ存分に暴れていいぜい」

۱۵

「はい!! 美波ちゃん! (勝てる! 勝つんだ!)」

「では、召喚して下さい」

「試験召喚！」

『Fクラス』姫路瑞希 &『Fクラス』島田美波  
数学 432点 & 202点

「へへ、中々じやねエかア、流石だな」「んじや、行くぜい一方通行！！」

# 「試獣召喚」

現れる彼らの召喚獣。一方通行の召喚獣は灰色と白の柄の長袖、土御門の召喚獣はアロハシャツに制服という格好で一人とも、「……素手?」

と田舎には、たまに

姫路が言つ。

「悪いけど、勝たせてもらうわ！優勝しないといけないの！」

島田が宣言したところで、

「はあ、どっちが弱いんだか…」

『Fクラス 土御門元春 & Fクラス アクセラレータ  
数学 65点 & 759点』

彼らの点数が表示される

「「ええ！？」」

島田と姫路は同時に驚いた。

「なつ、なんて点数！」

「ど、どうこう」と…？」

土御門が、

「どうもこうも、じいつの得意教科なだけだにやー」

「そ、そんな」

そこで島田が、

「一人とも素手なんだからリー・チを利用し…」

言葉の途中で二人の召喚獣の間に暴風が吹き荒れる。  
アクセラレータ  
一方通行が

「今をどちらかにやつてたら死ンでるぜ！」

「くっ、仕方ない、一方通行を集中的に攻撃するわよ…！」  
「はい…！」

島田が右側から大きく迂回して一方通行に迫る。  
アクセラレータ

姫路は前に進みながら炎を発射する。

「なるほどオ、だから迂回したンだな」

一方通行は全く動こうとしない。

しかし、炎は一方通行に迫つて来る

なぜ動かないかはすぐに解つた

「そ、そんな、何で……っ！」

炎が一方通行に当たつて跳ね返つて来たのだ。

姫路は、それを見て横つ跳びに飛んだが、もつ遅い。  
そこは、一方通行の射程圏内。

自分の放つた炎に当たりながら、一方通行の声を聞く。

「風速128メートル毎秒の暴風だア。じゃあな」

暴風の塊が姫路の召喚獣に当たつた。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

数学 0点 & 202点

□

島田は動きを止めた。しかし、その瞬間には一方通行が目の前にいた。

「くつ……！」

風をまとつた一方通行の拳が島田に当たる。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

数学 0点 & 0点

□

勝負は決まつた。  
一方通行の圧勝で。

アクセラレータ

「土御門君と一方通行君の勝利です！－！」

「こつもより点数が低いけど、どうしたんだにやー？」

「次はテメエも強制参加だア、本気でやれ」  
補充説騎が簡単過ぎだから寝たンだよ

「当たり前だにやー」

「士御門、補充受けんぞ」

「急にどうしたんだにゃー？」

一方通行は、笑みを浮かべて言う。

「次はおもしれエ戦ハこなりそつだからなア二

アドバイスよろしくお願ひします。

## バグスキル

- - - - - その数分後 - - - - -

「頑張るうね、律子」  
りつこ

「うん」

対戦相手の女子二人が頷き合つ。微笑ましい光景だ。  
うなず  
ところで、どこかで見た一人のような……？

「では、召喚して下さい」

「「試験召喚っ！」」  
サモン

相手の一人が呼び声をあげると  
お馴染みの魔法陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした形態  
を持つ試験召喚獣が呼び出された。

『Bクラス 岩下律子 & Bクラス 菊入真由美  
いわした きくいりまゆみ  
数学 179点 & 163点』

向こうは一人とも似たような装備の召喚獣だ。西洋風の鎧と剣を持つている。  
姫路さんの召喚獣を一般的な強さにしたような感じだ。

「さて、僕らも召喚しようつか

「そうだな」

「「試験召喚」」

現れる僕らの召喚獣。僕の召喚獣は相変わらずの改造制服と木刀を装備している。

一方、神童とまで謳われた我らが代表の召喚獣は

「……素手？」

何も手に持っていないように見える。目に見えない剣だとか？

「馬鹿が。よく見ろ」

雄一が召喚獣を動かし、拳を掲げてみせる。

「メリケンサックを装備しているだろ？」「

「ざ、雑魚だ！ 雜魚がいる！」

なんて弱そうな召喚獣なんだ。

装備がメリケンサックなんて、他の召喚獣には一本もいなかつたぞ。  
「行くわよ、修学旅行のお土産コンビ  
「律子、違うよ。チンピラコンビだよ」

僕らの召喚獣は木刀＆メリケンサックを手にした改造制服のコンビだ。

もはや何を言われても否定できない。

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久  
数学 179点 & 63点』

僕らの点数が参考として表示される。

「！？ ゆ、雄一！」

「なんだ」

「どうしてそんな点数になつてるの！？」

「179点なんて、Bクラス並の点数だ。バカのはずなのに！ バカのはずなのに！」

「前回の試合戦争以来、Aクラスに勝つ為に本気で勉強をしているからな」

と、なぜか苦々《にがにが》しい表情で告げる雄一。

この短期間でここまで伸びるのは、流石に神童と呼ばれただけのことはある。

「でも、なんで勉強を？」

雄一は『勉強なんてできなくてもやつていける』ということを証明したくてAクラスに勝負を挑んだはずだけど。それを覆しても負けられない理由もあるのだろうか？

「前に、翔子に聞かれたんだ」

「何を？」

「…………式はどうで挙げたいか、と」

霧島さんは本当に一途だなあ。

「俺はもう負けられない！ 次で勝たないと、俺の人生は！ 俺の人生は……！」

「雄一落ち着いて！ きっと幸せな家庭を築けるから……」「暴れだしそうになる雄一を羽交い絞めにする。

なるほど。道理である雄一が勉強を頑張るわけだ。

「そろそろ開始してもらえますか？」

木内先生が困った顔で僕らを見る。相手の一人も少し呆れ顔だ。

「あ、すいません。もう大丈夫ですから。ホラッ」

「婿入りは嫌だ……。霧島雄一なんて御免ばこあつ！ はつ！？」

とりあえず殴つて正氣に戻らせる。壊れた雄一の修理法、その2

「若干不安もありますが、とにかく始めてください」

そう告げると、木内先生は僕らから若干距離を取った。  
対戦相手の一人と向かい合い、勝負が始まる。

「律子！」

「真由美！」

「行くわよ！」

向こうの二人は名前を呼び合つて頷き、僕らを挟み込むように移動してきた。

「へえ～。結構息が合つているね」

「そのようだな。オンナノ口の仲良じい」<sup>は</sup>ことしては、それなりに良くなっているな

「彼らも雄一と頷き合つ。

「し、失礼ね！」

「私たちのチームワークは最強よ！」

少々怒った様子で反論してくるBクラスコンビ。

やれやれ。そこまで言つなら　本当にコンビネーションといふものを見せてあげようか。

「雄一っ！」

相棒に田中で合図を送る。僕らの仲だ。言いたいことは伝わつてい  
るはずだ。

「明久っ！」

向こうからの返事に僕も頷く。そして息を大きく吸つて、それぞ  
れの意見を口にした。

「「「」こは任せたつ！」」

意見は一致。

僕らは一人揃つて大きく飛び退つた。

「つて雄一！ お互い相手に任せてどうするのやー！」

「いや、ここは明らかにお前の出番だろー。俺は前の試合戦争で召喚をしたことがないんだぞ！？」

「なつ、なんて使えない男なんだ！ それならせめて僕の盾になれ！」

「使えないとはなんだ！ お前なんて点数がゴミみたいなもんじゃないか！」

「言つたな！？上等だ！ 表に出るー！」

「望むところだ！」

お互いに胸倉を掴み合つ。まさかここまで馬鹿なヤツだとは思わなかつた！

「男の子の仲良しつて変わつてるね……」

「私たち、女で良かつたね」「はつ！ 凄く蔑んだ目で見られてるー！」

「…………あ～、『ホン』間まを取る為に、一つ咳払いをしてから相手に告げる。

「コンビネーションは五分五分といつところか」

「「ええつー？」」

敵の女子一人の声が重なる。なんだいその心外そうな顔は。

「でも、僕らには学力とは別の『知恵』というものがあるー。コンビネーションは同等でも、知恵を使った作戦で僕らの勝ちは決まりたようなものさー。」

「律子。の人、あくまでもコンビネーションは同等といつことこしたいみたいだよ？」

「気にしちゃダメ。アイツはちょっとアレな人なんだから、どんどん僕の評判が一つの方向に収束し始めているような気がするけど、

ひとまずそのことは考えないようにしよう。

「雄二、例の作戦を発表してくれ！」

隣の雄二に話を振る。ちなみに僕は作戦なんて何も考えていない。

「いいだろう。俺の作軌はこうだ」

勿体ぶつて雄二か作戦の内容を口にする。

「明久が片方を引き付け」

「ふむふむ」

「　　その間に明久がもう一方を倒す」

「それ両方僕の仕事になつてない？」

「雄二が樂をするだけの作戦のような気がする。

「明久！　ここまできたら小細工こざいごは無用！　真まつ向むか勝負こうぶだ！」

「明らかに無策むさくをこまかしているようにしか聞こえないけど了解！

一人一殺で僕らの勝利だ！」

お互おながいに自分の正面にいる敵に召喚獣を突つ込ませる。作戦なん

て弱者が考えるものさ！

「律子、どうしよう？」

「こんなバカ相手に私たちが負けるわけないわ！　受けて立ちまし

よう！」

「うんっ！」

「一対一ではなく、一対一が二つといつ構図になる。

僕の相手は律子と呼ばれていた髪の長い女の子だ。

「やあっ！」

敵が手にしている剣を振り下ろしてくる。

僕はその動きに合わせて召喚獣を一步だけ横に動かした。

「こいつ！」

避けられた為、今度は大きく横に難いで来る。  
距離をよく測つて、小さく一步後退。

「ここの、ここのおつ！」

ムキになつて振り回してくる敵の剣を小さな動きで避けさせる。  
「うん……。なんだか弱いものいじめになっちゃいそうだ」  
相手の動きはどう見ても召喚獣の扱いに慣れているそれではない。  
そういえばこの子、前の試召戦争でも姫路さんに一撃でやられて  
いたな。

折角の実戦を早々に戦線離脱となつたわけだし、慣れていなくとも  
当然か。

とは言え、いつまで避けていても将があかないし、

「そろそろ いきますかあつ！」

大振りの攻撃を避けざま、木刀を握り締めて僕の分身は攻勢に転  
じた。

「え？ わつ！ キヤアッ！」

僕の場合は敵の鎧の隙間を狙つて的確に攻撃を叩き込まないと効  
果が無い。

一息で眉間、首筋、腿の三カ所を打ち据える。

一撃が弱いなら手数で勝負だ！

……でも、改造制服を着て木刀で女の子を滅多打ちにしている光  
景つて

どう見ても僕が悪役だよね……。

「ふはははは！ 無駄無駄無駄あつ！」

なんか、遠くからはもつと悪役っぽい声が聞こえてきた。  
敵を警戒しながら目をやると

その先には拳で剣と渡り合っているおかしな召喚獣がいた。

メリケンサック、意外と強いのかもしれない。

「……教育者としては、坂本・吉井ペアにはぜひとも負けてもらいたいものです」

木内先生の眩きが聞こえてくる。

可憐な女子生徒がヤンキーにいじめられている光景でも連想したのだろう。

僕だつて当事者でなければ、間違いなく向こうの味方だ。

「とどめっ！」

雄二の召喚獣が拳を敵の腹にブチ込む。

僕と違つて高得点だから威力もあるので、その拳は相手の鎧を貫いて本体に届いていた。

「それじゃ、僕も」

威力が低いとは言え、度重なる攻撃を受けてボロボロになつた相手に渾身の一撃を叩き込む。これで終わりだ。

「くううう！ 悔しいいいつ！」

「こんなのに負けるなんてつ！」

相手の一人が揃つて僕らを睨みつけてきた。

むう。こんなのつて言われても、ちょっと傷つくなあ。

「……勝者、坂本・吉井ペア」

凄く不服そうに木内先生が勝者の名を告げる。とうあえず一回戦は突破だ。

「まずは一勝だな、明久」

「そうだね」

雄二が意外と戦力になるよつとホツとした。さつきの戦闘も危なげなかつたし

なんでも器用にこなす男だな。

「それじゃ、改めて」

「うん」

「いやかに向かい合い、お互に手を差し出す僕ら。

「さつきの決着をつけるぞクソ野郎！」

「それはこっちの台詞だよバカ野郎！」

死闘を乗り越え、僕らの絆は更に強くなつた。

- - - - - その数分後 - - - - -

既に上条達を待ち構えている対戦相手の姿があつた。

Bクラス代表の根本君ねもとと、Cクラス代表の小山さんこやま。この二人は付き合つてゐるのだろう。

「所詮Fクラスなんだから、この勝負は貰つたようなものね」  
なに!?正面切つて悪口を言つてくるなんて、小山さんは性格が悪いな。

こんなオンナノコを上条さんは見たことがありません!!  
根本君は悪い噂がいっぱい流れてるし、嫌な力ップルだ。

「では、召喚して下さい」

「「「試験召喚!サモン!」」」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

流石はBクラスとのクラスの代表コンビ。点数も立派なものだ。

そして、もちろん俺らは素手、そして文用学園の制服。

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴  
数学 71点 & 649点』

対する俺と御坂の点数が表示される

「な、なんでそんな点数が高いのよ！？」

「これでも今回は失敗しちゃったんだから感謝しなさいよね  
「上条さんにはついていくことができない次元だ……」

「二人で上条とかいう奴をたたくぞ！…」

「わかったわ！」

「なんで俺だけが狙われてんだ！？」

「バカだからだよ」

一方的に傷つけられてしまつた上条。

「いくわよ！」

「ちょっと待つた、あなたの相手は私よーーー！」

「く……っーー！」

「僕が相手だよ！」

根本と上条の点数差は歴然、一瞬で終わるはずだった。だが、  
上条の点数は減らなかつた。

「故障か！？」

根本の言葉に上条はニヤリと笑い、告げる。

「ああ、『故障』だ

上条の召喚獣の右手が輝く。槍を止めた右手にはいつの間にか金色の籠手(レース)が装備されている。

根本はいつたん、間合いをとつた。

そして、走つて来た上条の召喚獣に向かつて槍を振り上げる。

「させるかよ！…」

一步で間合いを詰めて槍の根元を掴む。

すると、何かが砕けたような音がして、槍は塵(チフ)になつた。

「なに！？」

右手をそのまま握りしめ、殴る。

根本は少し吹つ飛ぶ。

「君の点数じや、ほとんどダメージを受けないね」

「そりや、どうかな？」

『Bクラス 根本恭一 & Cクラス 小山友香

数学 133点 & 192点

』

「な……つー？」

「俺の召喚獣はバグつててな、右手で受けた攻撃は完全無効化され

オールキャンセル

んだ」

「ちなみに言つて、物体を殴る時の抗力や、相手と自分との点数の差まで無効化されるんだ。だから、自分の持ち点分のダメージを直接与えられる」

「右手限定でな」

言葉と同時に左手で殴る。根本の蹴りを右手で防ぎ無効化。

キャンセル

そのまま根本の足をすくつて地面に倒す。腹を右手で殴る、すると抗力と点数差が無効化されたため腹の部分の鎧が塵になる。

『Bクラス 根本恭一 & Cクラス 小山友香  
数学 45点 & 192点』

「ラスト！」

胸倉を掴み、上にあげて、思いつきり殴る。

『Bクラス 根本恭一 & Cクラス 小山友香  
数学 0点 & 192点』

「さて、彼氏さんは戦死したけどどうする?」「く……つー!わたしが、Fクラスのバカに負けるわけないでしょ!」

「なるほど、それじゃあ仕方ない……」

そう言って、御坂の召喚獣はブレザーのポケットからコインを取り出す。

小山は、それなりの速さで御坂に向かってくる。

御坂はゆつたりとした手つきで、ピン、と親指でのコインを真上へ弾き飛ばす。

ヒュンヒュンと回転するコインは再び親指に載つて、  
コインが放たれた。

ドンー！と音がした時にはもう小山の四喰獸は腹に穴をあけて仰向けで倒れていた。

『Bクラス 根本恭一 & Cクラス 小山友香  
数学 0点 & 0点』

「うわっ……！」

「上条君と御坂さんの勝利です！」

「つかれた～～～」

「ほらっ、いくわよ！」

「へいへい」

と、いいながらも動かない上条。

御坂が上条の方へ歩いていく。

御坂はその時、自分の足で躊躇つまづいてしまった。

「うわあああ！？」

御坂が倒れそうになる。

「ちょ！おまつ！？」

上条がすんでの所で支える。

「うへへ、ありが……」

上条と田中が合った。

御坂は気づいてしまった。いま、上条の顔と自分の顔がほほぜ口距離にあることに…

「...」

それに、上條も氣づいたようで互いに顔をそらす。

「じゃ、じゃあ、いい行きましょう／＼／＼

— 1 —

目はそらしながらも、知らぬ間に手を握っている。二人ともその事には気づかなかつた。

アドバイスお願いします。

なんで、教科が全部数学なのかといつと書いてるのは一回戦だからです。これも、一回戦です。

「はあ～～～つかれた～～～」

全身から眠気を振りまきながら歩いているこの男の名はライナ・リードだ。

なぜ、こんなにも疲れているのかといつと、相手がAクラスの代表だということで

補充試験を受けてきたといつと、しかも全教科。しかも本氣で  
「ライナ、早く行くぞ」

「え～～～、やだよ

シャツ！…といつ音がする。

「ん、どうした？」

「いや、なんでもないです」

「ん、どうか」

と、言い、コンパスを頸動脈けいどうみゃくから離す。

「仕方ない、やりますか」

と、言って、闘技場へ向かつた。

Aクラスの代表とそのパートナー。

それは、

一年生の筆頭コンビ、学年主席の霧島翔子さんと秀吉のお姉さんの木下優子さんだ。

この一人には島田のような弱点科目がない。厳しい勝負になるだろう。

「Fクラスコンビか……」

と、言つたのは木下優子さん

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

と、言つてくる。

「だつてよフューリス、やつたじやん。お言葉に甘えさせてもりおつぜ」

「バカが、ここで負けたら……」

「あー、はいはいわかつてますよ」

そして、

「「「試験召喚!」」<sup>サモン</sup>

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子  
数学 362点 & 434点』

VS

『Fクラス ライナ・リュート & Fクラス フューリス・エリス  
数学 836点 & 158点』

「「えつ!?」」

木下さんとライナが同時に言つ。

「あんたFクラスなのになんで教師を軽く超えてるのよ！！」

「代表とそのパートナーだから俺よりちょっと強いくらいかなあ～

～っておもつたんだけどな」

「……こんなに強かつたなんて！！」

「二人合わせても勝てないってどうゆうことよ！？」

木下さんは完全なパニック状態だ。

「……優子、弱い方を狙つて。私が時間稼ぎをする」

「いや、ふたりでライナ・リュートを潰す！！」

「フューリス、休んでる。どうやら一人で俺を潰しにくるみたいだ」

「ん、わかった」

と言い召喚獣を後ろへ下がらせる。そして、お茶を飲みだす。

「ライナ」

「んあ？」

「絶対に勝つてこい」

「はいはい

二人はライナにすゞい速さで向かつてくる。

そして霧島が呟いた。

「フルミラー・ジュ

「……絶対不可視」

瞬間、霧島の召喚獣の姿が見えなくなつた。

それどころか、木下さんも見えない召喚獣も同様だ。

「あーそうゆう能力ね。まあ、俺には関係ないか

「ミラージュ・ブレイド

「……不可視刃」

「存在を解析、解除」

バリーン！！と音が鳴る。

「……うそー？」

トンツ、と音した時にはライナの召喚獣の手は霧島の召喚獣の腕輪に添えられていた。

「存在を解析、解除」

次の瞬間、腕輪が粉々に砕けた。

「……なつー?」

すぐに一人の姿は見えるようになった。

そしてライナが言う。

「じゃ、おれも。『落涙の悪魔』  
フェルナ・リュートル

そして、空間に文字を書き込みながら唱える。

「求めるは雷鳴ゝゝゝ稻光」  
いづち

雷が霧島の召喚獣を貫く。

「……くつー!」

そのまま霧島の召喚獣の腕をひねり倒す。

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子  
数学 362点 & 0点』

「代表ーー!」

そしてライナが「ゴメンな」と言ひ。

「稻光」

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子  
数学 0点 & 0点』

「ライナ君とフェリスさんの勝利ですーー!」

ライナは左目をおさえ、  
「ちつ、侵食してきたか」と、言つた。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

アドバイスお願いします。

## 幻の生徒

坊主男とモヒカン男が呆然としている。

あまりの驚きに声すら出ない。といった体だ。

「つ、常村、相手は一人での点数だよな？」

「夏川、これは勝てねえ。諦めねえと」

「バ、バカ！推薦状がかかつてんだ。負けられねえだろ！」

「須川つて方をやれば……」

「片方だけやつても意味ねえだろ！」

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平  
数学 209点 & 197点』

彼らの点数は、誇つていよい点数だった。Aクラスという点もまた同じく。

しかし、彼らは敵を恐れていた。

Aクラスの中でも中堅か副将くらいの点数だ。

そんな彼らが恐れているのは一人の青年だった。

クラスは2-F、『出席番号零』の異名を持つ青年だ。

理由はクラスに居る所をだれも見たことが無いから。

しかも、その青年の名前は文月学園創立2年目から2-Fにある。ずっと留年していた青年。だが、バカではない。むしろ天才だ。

この青年は別の異名、そして伝説を持っている。どちらかというとこっちの方が有名だ。

『オールサウンドオーバー』  
「全教科完全攻略」。マジでいたのかよ

オールサウザントオーバー  
全教科完全攻略。名前の通りの異名だ。

全教科で1000点以上の点数を確保している男。勝てぬものなどいない。

『さて、あなたたちにほっこりで消えてもらいます』

「い、行くぞ！－！」

「勝つて、受験勉強とおさらばだ！－！」

ここではじめて二人は青年、いや2・Fの御剣神哉の点数を見た。みつめい ひがい さやか

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮  
数学 1179点 & 57点』

『

「勝てねえ……」

「やるしか……っ！－！」

『ゴッド・オブ・スキル  
神次元操作！』

「な、なんだ！－？つわあああ！－！」  
「く、来るな！－？つおおおお！－！」

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平  
数学 0点 & 0点』

一瞬で勝負がついた。圧勝だ。

「御剣さん、ホントにいいのか？俺がパートナーで

『はい、約束を守ってくれれば問題無いですよ』

そして御剣は言つ。

『吉井さんと坂本さんのペアにだけは負けないといけませんからねえ』

それから数分後……

「明久に雄一」殴り合いなぞしておらんで、急いで教室に来てくれんかの？」

相棒と友情を確認し合つていると、校庭の特設ステージに秀吉がやつてきた。

少し息が弾んでいるところを見ると、急いでいるみたいだ。

「あれ？ 喫茶店で何かあつたの？」

「うむ。少々面倒な客があつての。すまぬが話は歩きながらで頼む」

「あ、うん。了解」

先を急ぐ秀吉に続く僕と雄一。ビリヤリアブル発生と見て間違いなさそうだ。

「……営業妨害か？」

歩いている雄一の目が細くなる。

学園長のところに行つた時と同じ田つきだ。何か思うところがあるのだろうか。

「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出でこないんじやない？ そんな真似をしたところで何のメリットもないと思うよ」

せいぜい僕らが大会に集中できなくなるとか、そういう程度だ。

「いや、それが雄二の言つたとおりなんじゃ」

秀吉の端整な顔が歪む。まさか本当に営業妨害?

「そうか。相手はどうのどうつだ?」

「うちの学校の三年じゃな」

しかもよりによつて三年生か。まったく、生徒の中では一番大人のくせに。

「ま、そういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを充てるのが一番だよ」

実際に雄二は腕うで筋も強いし、いつもことにはうつてつけだ。

「それが人にものを頼む態度か? .....まあいい。喫茶店がうまくいかなければ、明久の大好きな姫路が転校してしまつからな。協力してやるわ」

「べつ! 別にそんなことは一言も.....!」

「あー。わかつたわかつた」

「その態度は全然わかつてない!」

再三に渡つてからかつてくる雄二に文句を言いながら歩く。

すると、教室近くとは言え、廊下にまで響く大声が聞こえてきた。

「む。あの連中じやな」

「じゃ、ちょっと始末してやるか」

首を口キ口キと鳴らしながら教室の扉に手をかける雄二。

本当、こいつたことには減法強いよなあ。

「マジできつたねえ机だな! これで食い物扱つていいのかよ!」

雄一が扉を開けるなり耳に飛び込んだ罵声。

「どうやらクロスで覆い隠したみかん箱がお気に附せなかつたらしく  
クロスを剥がして文句を言つていた。

なるほど。絵に描いたよつたチンピラだ。

『うわ……確かに酷いな……』

『クロスで誤魔化していたみたいね』

『学園祭とは言つても、一応食べ物のお店なの』……

その様子を見たお姉さんが口々に咳く。

マズい。喫茶店での悪評はかなりの痛手だ。

「雄一、早くなんとかしないと経営に響くよ」

「そうだな……。秀吉、ちょっと来ててくれ」

「? なんじや?」

「至急用意してきて欲しいものがあるんだ」

雄一が秀吉に耳打ちする。秀吉に頼むつてことは、演劇用の小道具か何かだろうか?

「一応用意はできるが……。あつても一つ程度じやだ?」

「それで充分だ。その後はまた他から調達してくれるさ」

「了解じゃ。すぐに戻る」

そう言い残して、教室内のクラスメイト数名に声をかけて秀吉は足早に去つて行つた。

「明久。お前はあの小悪党どもの特徴をよく覚えておけ」

僕にはそう指示を出しつつ、雄一はクレーマーのつじのつじと近付いていった。

「? よくわからんけど、了解

あとで報復でもするつもりなんだらつか。とりあえず言われたとおり相手の特徴を覚えておけ」

営業妨害をしているのは一人。

いずれも男だ。片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカンという非一般的な髪型をしている。もう一方も175センチくらいの普通の体格で、

「こちらは丸坊主だ。なんとも覚え易い髪型の一人だなあ。

「まったく、責任者はいないのか！　このクラスの代表、コペツ！」

「私が代表の坂本雄一です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

「ホテルのウェイターのように恭<sup>うやうや</sup>しく頭を下げる雄一」。

話しかける前に相手を殴り飛ばしていなければ、まるで模範的な責任者のようだ。

「不満も何も、今連が殴り飛ばされたんだが……」

殴られていなisoftモヒカンの男が驚いている。

無理もない。僕だつていきなり友達が殴り飛ばされたら驚くだろう。

「それは私のモッターの『パンチから始まる交渉術』に対する冒<sup>ぼう</sup>瀆<sup>じく</sup>ですか？」

凄い交渉術だ。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！　なにが交渉術ふぎやあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締<sup>し</sup>める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！　こちらはこの夏川<sup>なつかわ</sup>を交渉に出そつ！　俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村<sup>つねむら</sup>！　お前、俺を売<sup>うり</sup>つと言つのか！？」

慌てているのは坊主頭の夏川と呼ばれた男。

覚えにくいから、『夏坊主、常モヒカン』で覚えよう。

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

あ、雄一の仮面<sup>ひんげん</sup>が外れた。

どうやら慇懃<sup>いんぎん</sup>な態度はあまり継続<sup>けいぞく</sup>しないみたいだ。

それにもしても、常夏コンビとは巧<sup>うま</sup>い命名だ。座布団一枚。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらひう」

モヒカン  
常村先輩が雄一から剣呑<sup>けんのん</sup>な霧氣を感じ取つて撤退<sup>てつたい</sup>を選ぶ。

賢明な判断だ。

「そうか。それなら

大きく頷いた後、夏川（坊主頭）先輩の腰を抱え込む雄一。

「おいつ！　俺もう何もしてないよな！？　どうしてそんな大技をげ

ぶるあつ！

「これにて交渉は終了だ」

バツクドロップを決めて平然と立ち上がる。できればあの交渉術は門外不出であつて欲しい。

「お、覚えてろよつ！」

倒れた相棒を抱えて走り去つていくモヒカン先輩。これで問題は片付いた。

『流石にこれじゃ、食つていいく氣はしないな』

『折角美味しそうだつたんだけどね』

『食つたら腹壊しそうだからなあ』

『というわけにはいかなかつた。』

クロスの中を田の当たりにし、ガタリ、と音を立てて一人目が席を立つ。

あれは教頭の竹原先生か。たけはらうちのクラスに来てくれていたのか。こういつた催し物が好きそうには見えなかつたけどなあ。

『店、変えるか』

『そうしようつか』

「あ、お客さん！」

一人目が席を立つと、次々とお客さんが席を立つてしまつ。

集団心埋つてやつだらけ。いつなると懸評は風に乗るよつて学校中に広がつてしまつ。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのような物を使つてしまつました。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

そんなお客さんたちに深々と頭を下げる雄一。

その後ろには、秀吉や他に男子数名が立派なテーブルを運んでいる姿がある。

あれは……演劇部で使つている大道具のテーブルか。

なるほど。いうしたらお客さんの田の前できちんと衛生面を改善した姿を見せられる。

雄一も一応風評について考えていたみたいだ。

「あれ？ テーブルを入れ替えるの？」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえてきた。

「あ、おかげり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「勝てませんでした」

姫路さんが落ち込んでいる。

「姫路さんが負けた！？」

姫路さんの点数は十分高い。というより△クラスに入れる程の実力を持つている。

その姫路さんが負けた！？何かあつたのかな？

「姫路さんもしかして何かトラブルがあつて……」

その言葉を姫路さんが遮る。

「普通に実力で……」

そんなバカな。そんな点数の奴がいるのか。

「相手は誰だつたの？」

美波が答える。

「一方通行よ」

「そんな、だつてあいつは僕と同じくらいの点数だつたはずだよ！？」

？

「でも違つた。あいつは実力を隠していたのよ。だつて700点台

だつたわよ

「そうだつたのか。

「明久君、頑張つて2回戦勝つてください！」

そんなに勝負にこだわる性格じゃなかつたと思つけど、今回は場合が場合だ。

勝ちにこだわるのは当然だわつ。

「ねえねえ、テーブルを入れ替えちゃつてもいいの？ 演劇部にあ  
るテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょ？」

美波の指摘ももつともだ。

さつき秀吉も二つ程度しかないと言つていたし、  
かといつて残りのテーブルをそのままというワケにもいかないし：  
…。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きます  
ので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、  
『ゆつくりとおくつろぎ下さい』

そう締めて、雄一は僕らのいる廊下まで戻ってきた。

「ふう。こんなところか」

小さく息をつく。慣れない丁寧語で疲れたのかもしれない。

「お疲れ、雄一」

「何があつたのかわからないけど、お疲れ様」

「お疲れ様です」

「おう。姫路に島田しまだか。その様子だと負けてしまったみたいだな」

相当驚いている様子。この一人なら勝てると確信していたんだろう。

「そうなの、それより、喫茶店は大丈夫なの？」

さつきの騒動でお客さんは減つてしまつたし、悪評だつて流れる  
だろう。

喫茶店も姫路さんの転校に関わる大切な要素だ。失敗するわけには  
いかない。

「このまま何も妨害がなければ問題ないな」

何か引っかかる言い方だ。まるでこの後も妨害があることを予想  
しているような……。

「あの、持つてくるテーブルは足りるんですか？」

「ああ、それか。そうだな。明久、二回戦まではあとどのくらい  
時間がある？」

腕時計を見て確認する。僕らの一回戦は十一時開始だから

「小一時間つてどうかな」

「そうか。あまり時間がないな……。ちやつちやと行くが。明久、ついて來い」

「ウチらは手云つなくていいの？」

「先生は三條ねがくてもいいの、  
指名を受けなかつた美波が尋ねる。

に頑張ってくれる気のよつだ。  
じいわつか

「お前らは喫茶店でウロイドレスをやつて、

取り戻す為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！ 頑張りますっ！」

姫路さんも当然やる気充分。いしなあ……。僕も客として入って笑顔を振りまいてもらいたいよ。

「おい明久。行くぞ」

「あ、うる。でもどうやら行けのやれ?」

「テーブル調達だよ

悪そうな笑みを浮かべた。

アドバイスよろしくお願ひします。



## 疑惑の勝利

吉井君に坂本君！ 今日という今日は、許しませんよー。」「明久、走れ！ 捕まつたら生活指導室行きだそ！」

「鉄人の根城！？ 「冗談じやない！」

布施先生に追われながら、僕と雄一は必死に廊下を走っていた。何故走っているのか？ それはそこに階段があるから というワケではなく、

「せっかくパクったテーブルだ！ 落として壊すなよー。」「わかつてるよ！」

学園の応接室からテーブルを盗んできたからだ。

「それにも、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか……」

これは布施先生の後ろから追つてきている長谷川先生の台詞。先生は体育の授業がないから運動不足なのかな？

「とにかくいつたん喫茶店に使つちまえばこつちのモンだ！ 一般客が使用中のテーブルを回収なんて真似は、いくら教師でもできないだらうからな！」

この極悪人め。おかげで一緒にいる僕までどんどん評価が下がつていぐじやないか。

「こうなつたら、西村先生に応援を

」  
布施先生が携帯電話を取り出す。

西村つて言うと、鉄人か！ この状態で鉄人から逃げ回るのは至難の業だ！

「明久！」

「あいよつ！」

走りながら足で上靴を片方脱ぎ、雄一に向かつて蹴り上げる。

「くらえつ！」

「うわっ！」

その上靴を雄一が空中で蹴る。

そしてシューートは狙い違はず布施先生の手元に命中。携帯電話は宙を舞つて廊下に転がった。

「それでは御機嫌よう、先生方！」

「ああっ。僕の上靴……」

布施先生が携帯電話を拾つている間に僕らは全力ダッシュ。姿が見えなくなつたところでテーブルを放置して、秀吉の携帯にその置き場所をメールする。

これで回収班が動いて喫茶店に持つて行つてくれるはずだ。

「よし。次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！ それが終わつたら二回戦だ！」

「はあ。僕と雄一はいつか停学になる気がするよ……」

学園内をテーブル泥棒として駆け回つたおかげで、テーブルの目標数を確保することには成功した。

これで悪評の元も消えたし、喫茶店の方は問題ないだろ？

「で、二回戦の相手はどんな連中？」

特設ステージに向かいながら、隣を歩く雄一に聞く。

時間ギリギリまでテーブル奪取作戦をやつていたせいで、二回戦の相手を調べる暇さえなかつた。弱そうな相手だといいんだけど。

「対戦表を見た限りだと、勝ち上がつてきそうのは なつ！？」

うそだろ

雄一の目線を追う。すると、その先には既に僕らを待ち構えている対戦相手の姿があった。

「かつ、上条！？」

「吉井かよ！？」

二人は驚いていた。

「バカなはずなのに！」

「いや、どっちもどっちだろ」

ここで御坂が、

「どんぐりの背比べね……」

と、ため息交じりに言つ。

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めてください」

今回の立会人は、多少のことには目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生だ。

「「「「試験召喚！」」」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

み、御坂さんってそんなに頭良かつたの！？

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴  
英語W 52点 & 403点』

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久

「く……つー御坂の頭が良かつたことは計算外だつたつ！」

そんな時、御坂と上条は小声でこんな話をしていた。

「（御坂、もつと点数を下げてこいつて言つただろ）」

「（し、仕方ないでしょ！ニアミスつて感じの答えが思い浮かばなかつたんだから）」

「（そういうときは全部に this is the penmanship）」

「（……あんたそれ本気で言つてゐ？this is a pen）」

「（うそ！？初耳なんですが！？）」

「（はあ、正真正銘バカなのね）」

「こんなやつとりをしていた。

「雄一、勝つしかないんだ。行くよ！」

明久が飛び出す。

木刀を振り上げて斬りつつとする、上条はとつさに右手で防げつつある。

そこを御坂が、

「右手を使わない！？」と言つた。

「だーもう、だらっしゃあああ！？」

強引に右手を引いて左手をつき出す。しかし、そこに木刀はない。

「もうつた！？」

軌道は縦切りから横薙ぎに変わっていた。

「つおお！？」

あばらに打ちこむ。上条は右手を出そうとしてやめる。

左手で木刀を掴もうとするが明久は上条の右側に抜けた後。

上条が振り向いた直後に喉元を貫く。急所なので即死だ。

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴  
英語W 0点 & 403点』

「よし、勝つたな」

「つぎは御坂さ「私たちの負けよ」えつ？」

「どういうことだ？」

雄一が訝る。

それもそうだ。僕だつて気になる所だ。

「味方が戦死したのに見捨てられるほど非人道的な人間じやないのよ」

ああ、なるほど。

「でも召喚者に実害はないはずじやないの？」

僕みたいに観察処分者じやなれば。

「こいつの召喚獣はバグってんのよ」

「なるほど、観察処分者じやなくともフィードバックが来るのか」

「その通り。でもメリットもあるけどね」

「そのメリットはなんなんだ？」

御坂が言う。

「召喚フィールド内の物理干渉能力、80%のフィードバック」

「80%だつて！？」

「冗談じやない。観察処分者でさえ10%のフィードバックなのになんで80%も！」

「なんでかつて言つとこいつのもうひとつの中があるからよ」

「さて、今聞いた限りメリットがひとつも無いんだが」

「次が本当のメリットよ」

「召喚フィールド内での抗力、点数差の無効化」

「つーー！」

「？」

「どうこつ意味？」

「明久てめえはとこどんバカだな。要するに上条の点数が相手にそのままえられるつづことだ」

「それはすゞーー！」

「まあ、そういうこと」

といつて御坂は上条を引きずりながら帰つて行つた。  
しかし雄一は険しい顔をしていた。

「（負け方が不自然すぎる。まるで負けなきやいけなかつたような負け方）」

「（最初の小声の話も気になる。少し尾行してみるか）」

「よし」

「雄一、どうしたの？」

「雄一は口元を歪める。

「あいつらを尾行する」

「まさか雄一に御坂さんを尾行するよつた趣味があつたとは……」「ねえよーー！」

-----数十分後-----

「ただいま……って、あんまりお密さんがないな……」  
テーブルが綺麗になつたにも関わらず、喫茶店内にお密さんは殆どいなかつた。

「お、戻ってきたよ、うじやの……ってなんでお主らは顔の面積が広くなつておるのじゃ？」

「ちよっとね、いろいろあつたんだよ」

実際の所は御坂さんに尾行がバレてフルボッコにされたんだけどね。あまり仕事が無いようで、ウヒイトレス役の秀吉も暇そうだ。

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。とにかく、雄一の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄つてくるつてや」

喫茶店が気になると言つていた割には暢氣のんきなもんだ。

「それより秀吉、これはどういうこと? お密さんがいないじゃないか」

「…………む。ワシはまだひとりおるが、妙な密はあれ以降来ておらんぞ?」

秀吉が首を傾げる。

「つてコトは、教室の外で何かが起きているのかな?」

「かもしけんの?」

そうやつて一人で考え込んでいると、

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビツ子』

『チビツ子じゃないくて葉月はつきです』

雄一と小さな女の子の声が聞こえてきた。

## 破壊の右手、創造の左手

雄一と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄一が戻ってきたようじやな」

「あ、うん。そうみたいだね」

はて、葉月……？あの声、どこかで聞いたことがあるような……？

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

ガラツと音を立てて教室の扉が開き、雄一の姿が見えた。

話し相手の子は小柄なのか、雄一の陰になつて姿が見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

二人はあつという間にクラスの野郎どもに囲まれてしまった。

お客様さんがいなくて暇なせいだろう。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですつ』

どうやら女の子は人を探していて雄一に声をかけたようだ。雄一のヤツ、なんだかんだ言って面倒見が良いからなあ……。

『お兄ちゃん？名前はなんて言つんだ？』

『あう……。わからないです……』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげよつといつ雄一の温かい気遣いが感じられる。

意外と子供好きなのかもしれない。

『えつと……バカなお兄ちゃんでした！』  
なんとも凄い特徴だ。

『そりゃ』

雄一が首を巡らせて、該当する人物を探している姿が人垣の間から見える。

『……沢山いるんだが?』

否定できない。

「あ、あの、そうじゃなくて、その……」

「うん? 他に何か特徴があるのか?』

『その……すつじくバカなお兄ちゃんだったんですね!』

『吉井だな』』

やだな、泣いてないよ?

「全く失礼な! 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ!

絶対に人違い

「あつ! バカなお兄ちゃんだつ!」

小さな子が駆けてきて、いきなり抱きつかれた。

「絶対に人違い、がどうした?」

「……人違ひだと、いいな……」

最近、周りの皆があまりにも僕のことをバカだつて言うから、少しずつ自分がバカに思えてきたよ。

「つて、キミは誰? 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合ひはいないよ?」

ひとまず顔を見る為に女の子を引き剥<sup>は</sup>がす。

「え? お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

女の子の表情が歪<sup>ゆが</sup>む。あ、マズい! 泣かせちゃつたかも!?

「バカなお兄ちゃんのバカあつ! バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか?』って聞きなれんかのう?」

なんだろう。僕まで泣きたくなつてきた。

「明久 じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな?」

「そうじやな。バカなお兄ちゃんはバカなんじや。許してやつてくれるかのう?」

ここまでバカを連呼された人間はそっぽいだろ。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに

「瑞希!」

「美波ちゃん…」

「殺<sup>や</sup>るわよ！」

「「ふあつー？」

突如首筋に激痛が！ なんだ！？ 何が起<sup>ひ</sup>こつたんだ！？  
瑞希。そのまま首を真後ろに捻<sup>ひね</sup>つて。ウチは膝<sup>ひざ</sup>を逆方向に曲げる  
から

「「、」うですか？」

いかん。殺されかねん。

「ちょっと待つて！ 結婚の約束なんて、僕は全然

「ふえええんつ！ 酷<sup>ひど</sup>いですっ！ ファーストキスもあげたのにー

つ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思つ」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふつ！ はなひを聞いてくらはいっ！」

いつもは優<sup>やさ</sup>しい姫路さんまで！

クラスから幼女暴行犯が出たと知られたら即転校に結びついちゃう  
からだろうけど、

この扱いはあんまりだ！

「仕方ないわね。一本刺したら聞いてあげるからちよつと待つてな  
さい」

「あのね、美波。包丁って一本でも刺さつたら致命傷<sup>ちめいじょう</sup>なんだよ？」

美波に足りないのは日本語力だけじゃないと思<sup>う</sup>つ。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、女の子が美波を見て涙を引っ込める。

お姉ちゃん……葉月ちゃん……ファーストキス……

「ああっ！ あのときのぬいぐるみの子か！」

思い出した！

そりいえば、前に小さな女の子がお姉ちゃんにプレゼントをしたい

けどお金が足りない。

なんて哀しそうにしてたから手伝つてあげたんだつけ。

あげたのは確か、大きなぬいぐるみだったかな？

その後観察処分者に認定されたりして色々とバタバタしてたから、すっかり忘れていたよ。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

女の子がふうっと頬を膨らませる。

「そつか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校がわかつたね？」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言つて僕の制服を引っ張る葉月ちゃん。

「あれ？ 葉月とアキつて知り合いなの？」

そんな様子を見て美波が首を傾げていた。

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知つてるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

マジマジと葉月ちゃんの顔を見る。言われてみると、確かに似ている……。

元気そうな雰囲気とか、ちょっと勝気な目があたりとか。

「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会つてもらつてないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になつちやつてたり

……」「

姫路さんは何を言つているんだ？

最近、彼女もたまに壊れているような気がする。これもボロい教室のせいだろうか。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

葉月ちゃんがぺこりとお辞儀をする。礼儀正しい子だ。学園長とは大違ひだ。

「「こなんにちま、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる?」

「はいですっ! 毎日一緒に寝てます!」

「ぬいぐるみ? 每日一緒に寝ている?」

姫路さんも葉月ちゃんに何かぬいぐるみでもあげたんだろうか。美波とは姉妹らしいから、姫路さんはその関係で遊びに行つたときにでも知り合つたのかな。

「良かつた~。気に入つてくれたんだ」

そう言つて嬉しそうに微笑む姫路さん。なんだか僕の周囲には子供好きの人が多いな。  
僕も嫌いじゃないけど、どう接したら良いのかわからないので羨ましく思える。

「ところで、この密の少なさはどういうことだ?」

と、教室内を見回す雄一。そういえば僕もそれを考えていたんだつた。

葉月ちゃんの登場ですっかり忘れてたよ。

「そういうえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよつ

「ん? どんな話だ?」

雄一が屈み込んで葉月ちゃんの目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、つて

葉月ちゃんの言葉に、僕は思わずうめき声をあげそうになつた。確かにさつきまではクロスの下が汚かつたけど、それはもう解決したはずだ。

それなのに未だに噂が回つている。どうしてかしら? 悪評が流れているんだろう。

「ふむ……。例の連中の妨害が続いているかのように雄一は断言した。シバキ倒すか

口元に手を当て、まるで確信しているかのように雄一は断言した。「例の連中の妨害つて、あの常夏コンビ? まさか、そこまで暇じやないでしょ?」

なにより、坊主先輩はバックドロップまで食らつたんだ。これ以

上何かをしてくるとは思えない。

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「やうだね。少なくとも、噂がどこから流れでどこまで広がっているのかを確認しないと」

「こんなに小さな葉月ちゃんが聞いたくらいだから、もしかするとかなりの勢いで広まっているかもしねない。」

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにい」

ギコシと葉月ちゃんに手を握られる。

困った。普通に楽しむだけの学園祭だったらいくらでも一緒に遊んであげられるんだけど。

「「めんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはビリしても喫茶店を成功させなきやいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

言いながら素月ちゃんの頭を撫でてみる。

「む～。折角会いに来たのに～」

葉月ちゃんの頬は不満げに膨れてしまった。

けど、喫茶店は姫路さんの転校にかかる大事なことだ。  
後悔のないように全力をつくしておきたい。

「それなら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやつてい  
る他のクラスを偵察する必要もあるからな」

そこで雄一のフォローが入る。それももつともだ。敵情視察は経  
営戦略の基本だしね。

「ん～、そつか。それじゃ、一緒にお匂い飯でも食べに行く?」

「うん?」

膨れ顔が一転して満面の笑みに。表情が豊かで面白いな。  
天真爛漫つてこいついう子のことを言つのかな?

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもとは全然違う。妹に対しては優しいお姉ちゃんでいるんだなあ。

「ふむ。ならば姫路と雄一も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじやろし、早めに毎を済ませてくれると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？ ありがとうございます。木下君<sup>きのじた</sup>」

「これで雄一と姫路さんも一緒にということになつた。全部で五人。

混雑する学園祭の中を歩き回るには結構な人数だ。

「それでチビッ子、さつきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店<sup>は</sup>」

「なんだって！？ 雄一、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がクラスの成功のために、（低い）アングルから<sup>めんみづ</sup>綿密に調査しないとな！」

聞いた瞬間全力ダッシュ。

喫茶店は姫路さんの転校にかかる大事なことだ！ 後悔のないように全力をつくしておきたい！

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

背後からの罵倒<sup>ばとう</sup>も気にならないほどに、僕の心は躍<sup>おど</sup>っていた。

雄一は走っている最中にあることを考えていた。  
御坂を尾行したときに上条はあるキーワードを言つていた。

『イマジンブレイカー』

おそれらくこれが上条の召喚獣にあるバグの正体だ。

そして御坂は『坂本のペアには負けなきやいけなかつた』という風に言つていた。

もうひとつ上条には能力があるらしいが全く分からなかつた。

そんな考え方をしてる時、一人の青年とすれ違つた。その刹那に。

『上条さんのもう一つの能力は『幻想創り』ですよ

イマジンメイカ

なんて言われてしまつた雄一はその場で立ち止まる。

「どういふことだ？」

『どういふことも無いですよ。そのままの意味です』

「なぜ知つている

『なぜもなにも僕が手伝つたんですから』

「手伝つた？」

『さう、上条さんの手伝いをしたんですよ』

雄一はこの青年のことをひとまず信用することにしてみた。

『（まあいい、ガセだつたら縁を切ればいい話だ）』

『ひどいなあ、切り捨てるつもりなんて』

『つ！ まあいい、できればあいつの粗いとかを根掘り葉掘り、知つてる限り聞かせてもらおうか』

『僕が教えるのは2つだけです。1つ目、上条さんの能力は2つ

『そして2つ目、』

耳元に声が近付く、そして。

『あなたはオカルト側の人間だ』

『どういふ？…』

青年はどこかへ消えていた。

「ちつ…」

雄二の舌打ちが聞こえた。

「どうしたの雄二？」

「んあ？ ああ、今行く！ ！」

後ろで聞こえる声。

『さて、僕も仕事をしますか』

青年は口元を緩めた。

アドバイスお願いします。

## 血戦開始

「明久、ここはやめよ！」

「ここまで来て何を言つているのヤー！早く中に入るよー！」

「頼むー！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれー！」

目的の桃源郷は、我らが宿敵のAクラスに

【メイド喫茶『』主人様とお呼びー！】といつ名前で存在していた。

「そつか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをくぐる。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはクールで知的な美人メイド、霧島翔子さんだった。

「わあ、綺麗……」

姫路さんが感嘆の声を洩らす。確かに霧島さんは綺麗だった。長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、

黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。

同性が羨んでも仕方のない麗<sup>うるわ</sup>しだ。くそつ。やっぱり雄一のヤツが心から憎い！

「それじゃ、僕らも」

「はー。失礼します」

「お姉さん、きれーー！」

姫路さんと葉月ちゃんを連れて中に入る。すると、霧島さんは美波の時と同じように

「……おかえりなさいませ、『』主人様にお嬢様」と、出迎えてくれた。

「……チツ」

雄一も最後に渋々<sup>しぶしぶ</sup>入店してくる。霧島さんはやつぱり同じよう<sup>こ</sup>、

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

ちょっとアレンジされていた。

「霧島さん、大胆だいあんです……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」  
三者三様のリアクション。美波は見習つてびつかるのか気になる  
ところだ。

「お席に」案内いたします」

霧島さんが歩き出したり、僕らはその後ろ姿についていった。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客様さんの数だね～」

葉月ちゃんがくいくい、と僕の袖そでを引っ張る。

葉月ちゃんの言つとおり、Aクラスの広い教室はお客様さんで一杯  
になっていた。

メイド喫茶だからほとんどのお客様さんが男だと思つていたけど、意  
外と女人も多いな。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島さんが立派な装丁やうじのメニューを渡してくる。凄い。  
最優秀クラスは学園祭にまで手を抜かないみたいだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女の子三人は仲良くシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺は

「……』注文を繰り返します」

遮るような霧島さんの声。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を二つ、『水』を一つ、『メイ  
ドとの婚姻届こんいんとけつけ』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞつーっ！」

動搖した叫び声をあげる雄一。コイツが翻弄ほんねりされている様なんて  
珍しい。

「……」は存分に楽しませてもらひうとしよう。

「……では食器を『こ』用意致します」

女の子三人のところにはフォークが、僕の前には塩が、雄一の前には実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！『コレ本当にうちの実印だぞ！』びつやつて手に入れたんだ！」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」「霧島さんは優雅<sup>ゆうが</sup>にお辞儀<sup>じぎ</sup>をしてキッチンと思しき方向へと歩いていった。

……

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ」「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

雄一の目からは並々ならぬ決意が感じられる。やる気を出してくれるのは嬉しいけど、少し怖い。

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所つ『こ』で良かつた？」「うんつ。『こ』で嫌な感じのお兄さん一人があつきな声でお話ししてたの！」

葉月ちゃんが元気よく頷く。

嫌な感じのお兄さん一人か。それってやつぱり、

『おかえりなさいませ、『こ』主人様』

『おう。一人だ。中央付近の席は空いてるか？』

と、話している途中で新規の客の声が聞こえてきた。聞き覚えのある下品な声だ。

「あ、あの人達だよ。さつき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言つてたの」

声の主は、さつき僕らのクラスで妨害工作をしてきた常夏コンビだつた。

さつきもこの辺で聞いたつてことは、もしかして通つてているのかな？

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつきいったー・Fの中華喫茶は酷かつたからな

!』

『テーブルが腐くずった箱だつたし、虫も湧わいていたもんな！』  
人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大声で叫びあつ。  
こんなことをされたら悪評は広まる一方だ！

「待て、明久」

連中を殴り倒しに行こうとしたところを雄一に止められた。  
「雄一、どうして止めるのさー！あの連中を早く止めないと…」「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」  
雄一の目が鋭く連中を睨みつける。

確かにこんなに人の多い場所で殴り飛ばしたら、

Fクラスは悪童の溜まり場なんて印象を与えかねない。

そうなれば喫茶店の経営も厳しいし、

万が一姫路さんのお父さんの耳に入つたら転校が確定してしまつ。「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて

こうしている間にも噂は人の口に乗つて広まっていく。

わかつていながら何もできないなんて、あまりに歯痒はがゆい！

「いや、やるなら頭を使えということだ　おーい、翔子おー！」

「……なに？」

呼ばれた瞬間に霧島さん登場。常に雄一の近くにいたんじやないか、つてくらいに早かつた。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

雄一が顎あごで例の二人組を示す。すると、霧島さんは小さく首を振つた。

「…………わつき出て行つてまた入つてきた。話の内容もさつきと変わらない。

ずっと同じようなことを言つている  
端整な顔を少し歪めいた。

霧島さんにとっても愉快な客ではないらしい。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ

『いや、そんな事をする必要はないですよ』

「おわあー!?

「つむおー!?

僕の隣にはいつの間にかアニメキャラー?って思ひほどの美青年がいた。

『僕に任せてくれさい』

と言つと、常夏コンビの方へ歩いてつた。

『大声で話をしないでください。他の人に迷惑です』  
と言つと、青年は常夏コンビの耳元に口を近づける。  
何かを言つているようで、小さく何かが聞こえる。

すると、常夏コンビの一人の顔がどんどん真っ青になつていき、いきなり青年に土下座をした。

「すいませんでした!!」

『分かればいいです』

そう言つと常夏コンビはものすげに速さで会計を済ませ帰つて行つた。

「何を言つたの?」

『みんなに言いふらすと学園内に味方が誰一人居なくなるよつた噂を立てようとしたしました』

案外鬼畜だ。

「雄二、そろそろ三回戦が始まるよ

「何? もうそんな時間か?」

慌てて会場に向かつた三回戦。到着すると、待つていたのは……

「やつたじやねーか、明久」

「そうだね。姫路さんと美波の仇打ちだ」

「「全力で行くぞーー！」」

「そオか、だつたら」

口が裂けたような笑みを浮かべ、叫ぶ。

アドバイスお願いします。

## 最強と「いつ目のバグ」

- - - - - 数十年前 - - - - -

「はア！？ンなモンなのか？Aクラスってのは…」  
一方通行は驚いていた。なぜかというと。

「よく考えるにやー。一方通行は学園都市最高の頭脳。言いかえれば世界一の演算力にやー。その点数を超えるっていう方が無理難題だと思うにやー」

一方通行がうつむく。

「返せ……」

「どうしたんだにやー？」

「オレがそれなりに頑張つちまつた時間を返せつってンだよオオオ

オオオ！！！」

「やーーーーー！」

対戦相手は氣の毒そうに見ている。

「土御門オオ！責任とつてあの一人を始末しろ」  
「りょ、了解でありますにやー。一方通行隊長」

「――試獣召喚…」

この場にいる三人の生徒の召喚獣が出現する。  
一方通行は一人、あまり乗り気じやなさそうに「試獣召喚…」と  
呟く。

『Aクラス 緋山紅輔 & Aクラス 水川蒼』  
英語W 246点 & 231点

流石はAクラスコンビ。点数も立派な方だ。  
でも、勝てない。

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
英語W 727点 & 232点』

「さーて、暴れるぜい」

鋭角に突っ込みながら攻撃を加える。しかし避けられる。  
そのまま円を描くように動く。

途中で突っ込みながら常に動いている状態、相手は避けるだけで精

いっぱいといった体だ。

周りから見ても明らかに土御門の方が速く動けている。

「ちくしょう！相手の方が点数が下なのに何あんなに速ええんだ  
よ…」

「気になるかにやー？」

と土御門が聞いてくる。

「んじや、ネタばらしだにやー…」

「操作の差だにやー」

「操作の差？」

土御門は攻撃を続けながら言つ。

「そうだにやー。俺は自分の身体からだと同じように召喚獣を動かせるに  
やー」

「俺は運動神経はいい方だから…な…！」

言葉と同時に攻撃を繰り出す。

しかしそれで攻撃は終了。二人から離れた。

「下準備は完了」 さあこれから。魔術師による魔術の詠唱スペルスタートするぜい！！

そう言つた瞬間に周りの空気が変わつた。

「今、魔法陣の中に居る一人には魔術をくらつてもうづばい」  
かいじょう  
手伝つて

そう言つと、魔法陣から光の繩が伸びてきて一人の召喚獣を縛り上げる。

「絶対にほどけないようにキツめにしばつておくぜい」  
言つと同時に、地面が隆起し、鉄の鎖と拘束具が出てきて一人の召喚獣を地面上に押さえつける。

「これから一人には縛られた状態から死んでもらひ」  
脱出じて

土御門の召喚獣は吐血し、わき腹から血がにじみ出でている。

「5秒以内に脱出できなかつた場合..炎が襲いかかつて来る！..！」  
きついお仕置きだ

そして、

「消えろ」  
逃げる

「炎は消えぬ、全てを灰に還すまで」  
FANTS  
PENNINLIST  
ASRFMTMEDS  
INDONOMSM

「何も救わぬ業火を拡げ、ただ燃やし尽くすだけ。」  
NNSRUIET  
GEDEFA

「肥えた大地を焦土へと、豊かな海を荒れ地へと。」  
RTTINDE

「そこにはただ響くだけ、炎の魔神の咆哮が！..」  
GEDEEA

「GAME OVERだにやー」

「イ、と笑い、咳く

「焰精業火」  
イフコート・ザイ・ファーマンマ

魔法陣から炎が立ち昇る。何かが爆発したような勢いで炎が昇つて来る。

少しして、炎は消えた。勝負はもちろん…

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
英語W 727点 & 100点』

「アクセラレータ君と土御門君の勝利です！」

「土御門、大丈夫か？さつき召喚獣が吐血してるように見えたんだが」

「問題無いぜよ。まあ、これはもう使いたくないにやー」

土御門のバグ、それは、『肉を切らせて骨を断つ』という能力。点数を払い、その2倍のダメージを相手に与える。そのかわり、陣を描いたり、詠唱をしたりなど、面倒なことはいっぱいだ。

2人目のバグ。

しかし、それ以前にスパイ。それが土御門元春という男だった

「俺は天邪鬼なんでな。  
（あそつき）」

その言葉は誰にも聞こえなかつた。

アドバイスお願いします。

# 白銀の鬼神、金色の悪鬼

そう言った  
方通行の声は、会場中に響き渡った。  
アクセラレータ

「そ、それではああー?」

完全にビビつてしまつた先生が、マイクを捨てて大きく後ずさつた。  
一方通行以外の3人は苦笑しながら言つた。

「「「「試験召喚！」」」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

服装は見るからに不良同士。

【不良コンビVS街のチンピラコンビ】にしか見えない戦いだ。

「明久、土御門の警戒は要らない。問題は一方通行だけだ」  
アクセラーテ

それでかなり失禮な発言だと思ふにやう

「柳井貞一 著」

「失礼な！？僕は少なくとも土御門君よりは頭が良いと思うよ

!

「はあ（ハア）、ハ力た

――そんな「」とはなー（）!!

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久

化学 236点 & 92点

』

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
化学 912点 & 178点

』

「「んな!?」」

「なんだよ! 土御門君はバカじゃないのかよ!」

「まあ、バカな方に部類されるぜよ。だが、これは得意教科。これと保健体育、英語W以外は吉井と同じくらいぜよ」

「一方通行、てめえに死角はねえのかよ。」

「一方通行、てめえに死角はねえのかよ。」

「半分驚き、半分呆れといった表情で一方通行を見る。  
「あるに決まつてンだろ。オレだつて古典や現代国語は低い方だし  
な」

「じゃあ400点以下の教科はあんのか?」「  
「ねエよ」

「はあ、死角なんて無いも同然じやねえか」

「まあ、とにかくやうづば」

「いや、棄権させてもらひつ」

「「ええつー?」」

「あア?」

「どういうことだ雄一! 姫路さんの転校はどうでもいいというのか!  
それなら僕がお前のその腐った性根を…ってあれ? 確か一方通行君  
はFクラスだし…

なるほど! 姫路さんのお父さんに『Fクラスにはこんなに頭のいい  
人がいる』ということを見せれば、転校の話を無しにしてくれるか  
も! さすが雄一! 神童と呼ばれていただけの事はあるね!  
でも、学園長の話はどうなるんだ?

「（俺の読みだと一方通行と御坂やライナは繋がっている。もしさうなら…）」

「ンなこたアさせねエよ」

「（そらー食いついた！だとするとこつらは俺らを勝たせようとする。つてことでもう一声！）」

雄一は嫌な笑みを浮かべながら聞く。

「それは俺たちが勝たなきやいけない事情があるからか？」

「どういうこと雄一？」

「あア」

一方通行はまるでこう聞かれるのを予見していたかのように言つ

「随分と冷静だな。秘密の事なんじゃないのか？」

「まあそうだが、テメエの頭ならこまではたどり着けると踏んでいたからな。想定内だ」

「（裏があるのは予定していたが、相当深そうだな）」

「たぶんテメエならオレ達とライナが繋がつることも読んでんだろ」

「だがなア」

と言葉を切る。そして

「今はンなこと忘れる。オレは例え負けなきやいけないとしてもテメエらが勝てる範囲で全力を出す。だからテメエらはオレらを倒すこと集中しろオ」

言い終わつた後に雄一は口角を吊り上げる。

「なるほど、それじゃあいくぜ！一方通行！！」

「なんだか知らないけど土御門君のあいだは僕だ！」

二人は同時に言つ。

「「かかってこーーー！」」

明久の召喚獣は木刀を縦に振りおろす。

「てい！」

土御門の召喚獣は円を描くように後ろに回り込み、ハイキックをする。

明久の召喚獣は勢いを殺さずに右に避ける。

「おわっと

土御門の召喚獣が脚を振り切る直前に逆方向に蹴り拵つた。

「ふん！」

「明久の召喚獣が吹き飛ばされ、壁にぶつかり、痛みがフイードバ

ックする。

「オレの動きについてこれるかにやー？」

なんて言いながら不規則なフットワークをしている。

「このつー！」

明久の召喚獣はその場から土御門の召喚獣の間合いへと飛び込んで

つた。

「隙だらけぜよ」

言葉と同時に、明久の召喚獣の顔面に向かつて拳が放たれた。

しかしそれを巧みな操作で避け、木刀をあばらへとたたき込む。

「まだまだあー！」

よろけた土御門の召喚獣の顔面へと木刀を振る。

しかし土御門の召喚獣は一步前へと出て、複雑な動きで反転し、バ

ックステップをした。

明久の召喚獣が着地した瞬間、明久の召喚獣の足元の紋様が輝く。

「じゃあな」

そう言ってから北斗七星の星座の形になるように詠唱しながら前進する。

「D C N F O S D X M S S A V R O P R  
北の夜空に輝くは、我を照らす七つの星。その名は北斗、その意  
は洗礼。その輝きは裁きの光、北斗の裁きは罪を語る！－！」

明久はあと一步で魔法陣を出られる。だが…。

「北斗の罪十字」スウェインス・ディ・クローチェ

魔法陣から巨大な十字架が現れる。

その十字架は輝きながら光の粒子となり、散つた。  
土御門の眼に明久の召喚獣は映らなかつた。

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久  
化学 236点 & 26点』

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
化学 912点 & 0点』

なぜなら距離が近すぎたから。

「吉井、おまえどうやってあそこから…」

「あの光の十字架が出てきたとき、直感で一步で跳べるって思ったんだ。そしたら跳べたんだ」

「（なるほど……馬鹿の友ハマシカ）の能力の片鱗か。ゴット・オブ・バトルセンス絶対脅力直感。恐れ入るぜい）」

「これで2対1だね。それじゃあ雄一」

「ああ」

「全力で行くぞ！……」

アクセラレータ一方通行は、それに応えた。

「オレもなアアアアアアアア！……！」

3人は同時に走り出す。言いたいことは一つだけだった。

「　「　「俺はお前を（テメエを）ぶつ飛ばす（ぶつ殺す）！――！」

」

アドバイスお願いします。

## 最強との決着

「ハツハアー……最つ高オーダねエ……」

「つ……く……！」

「どうしたどうしたア！もう終わりかア？」

「まだまだあ……」

「いいねエ、もつと<sup>アクセセラレータ</sup>楽しませてくれよなア！オイ……！」  
とは言つたものの、一方通行<sup>アクセセラレータ</sup>を開ける策が全く見つからない雄二と明久だ。

一応ハンデキャップマッチながら一方的に攻め立てられててしまつてゐる。

そのハンデとは……

- - - - - 数分前 - - - - -

「だからオレはハンデを付けて勝負しようとしたんだが……どうだ

?  
? <sup>アクセセラレータ</sup>

と一方通行は言つ。それに雄二は、

「どんなハンデか、<sup>アクセセラレータ</sup>にもよるな」

と言つた。それに一方通行は笑みを広げて言つた。

「それならオレに考えがあんだ」

「一つ目。オレは腕輪を使わねエ。二つ目。先制攻撃はテメエらからだア。三つ目。これはこの勝負とは関係ねエが、4回戦はテメエ

らの相手を棄権扱いにしてもらひア。三つ目のハンデは絶対だア」

「俺達にとつては最高つて言つて良いくらいの条件じやねえかいのか？」

「あア」

「分かつた。良いだろ？！」

「じゃあ早速ハンデの条件を整えるぜエ」

そう言うと腕輪が光り始めた。

「おい、腕輪は使わねえんじゃ……」

「そのための準備だ。反射を解除、AIM拡散力場による黒い

ヘル・ウ

翼の無効化を承認。ベクトル操作の解除、演算系統の短略化 成功。能力名『一方通行』の最終シャットダウンのセッティングを開始する。チェック項目の全てを終了または完了している事を確認。能力使用者の権限により、『SKILL-SYSTEM Accelerator』のシャットダウンを許可、承認し、これを実行する。

シユウウウ～という音が聞こえ、腕輪の輝きが収まる。一方通行の点数はこうなつていた。

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
399点 & 0点』

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久  
236点 & 25点』

となっていた。

「なんで点数が！？」

と驚きの表情を浮かべる明久。それとは対照的に『なるほど』という表情をしている雄一。

「……なるほどな。腕輪のシステムの完全シャットダウン、腕輪を使えなくしたわけだ。なぜそんな遠回りな方法で点数を削つたんだ？」

「言つただろ。『オレは例え負けなきやいけないとしてもテメエらが勝てる範囲で全力を出す。だからテメエらはオレらを倒すことに集中しろ』ってな」

「そういうことか」

「イ、と雄一は口角を吊り上げ、

「んじゃ、始めるとするか。結果の決まつた勝負を」

- - - - - 今 - - - - -

「（チツ、このままじゃ俺らが負けちまつ）。明久！」「

「分かつた！！」

「二人は目を合わせる。

「「コラボアタック 相互攻撃だ（ね）！！」

「（コラボアタック？まあ、作戦名で大体予想はつくけどなア）」

一撃目、明久が木刀で首元を狙う。余裕でかわされるが、かわした場所に雄二のパンチが唸る。

「チツ」

避けられない攻撃では無いため避ける。が三発目は回避できないためガードで防ごうとする。

「「（今だ！！）」

雄二がさつきの攻撃とは別次元の速さで攻撃を繰り出す。明久の点数のほうが低いため遅い。

つまり一つの攻撃が自分に同時に迫つてきているわけだ。普通に考えれば雄二の攻撃を防いだほうがいいが、一方通行は迷つていた。

「（どオする！どオすりやいいいんだよ！！吉井はオレの首元を狙つてる…坂本の攻撃は単純に死ぬかもしねエ…）」

しかし、この状況下で一方通行の思考は冴えわたつていった。そう、学園都市第一位の頭脳は…さまざまな演算を駆使して、一つの結論にたどりついた。すると、自然と体の緊張はほぐれていった。その結論は……。

「（学園都市第一位がビビつてどオする。そオだ。オレに後退は必要ねエ。ここは敢えて前に出てこいつらをぶつ飛ばす）」

明久は何かを感じ取ったよう風に静かに雄一に告げる

「雄一、引いて」

その言葉には少しだけ威圧にも似た響きがあつた気がした。

「お、おう

それを雄一も感じたのか、意外にも素直に応じる。

すると、今まで雄一が立っていた場所に一方通行の拳アカセラレータが振るわれる。

明久は振るわれた一方通行アカセラレータの拳をつかみ、ひねり上げる。一方通行

は動きを止めた。

「今だ！！！」

明久の声が響き、雄一が言うか否かのタイミングでフルスイングの拳を顔面に叩きつける。

バキイ！、という派手な音を立て一方通行アカセラレータは吹っ飛んだ。

「やつたか？」

雄一の声に反応するようにディスプレイに点数が表示される。

109

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春

0点 & 0点

』

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよつしゃあああーーー！」

「チツ、ハンデなンて付けなくても負けてたかもしねエなア」

何て言つてはいる一方通行アカセラレータだが、ハンデが無ければ確実に勝つていたのは分かつていた。

「それでは3回戦はかるうじて勝つてきた。ところどじやな？」

「そういうこと、4回戦までまだ時間があるけどね」

「ならば、済まぬがこいつの建て直しに協力してくれんか？」

秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。別に秀吉が悪いわけじゃないのに。

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要がありそうだな」

教室の中は相変わらず空席だらけ。悪評の元は断つたはずだけど、流れた噂はどうしようもない。

雄一の言つとおり、ここひで一つ大きなことをやらないとお姫さんは来てくれないだろ？

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室内を見渡している。僕も教室内を見渡したけど、特にできそうなことは思いつかない。

「雄一、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう言つて雄一が取り出したのは、刺繡も見事な水色と白のチャイナドレス。

「ほう。若干裾が短いよつた気もするが、これならば確かにインパクトはあるじやろ？な。コレを宣伝用に」

確かに姫路さんや秀吉が着たらインパクトは絶大だらう。王道だ

けど、悪くない作戦だと思つ。

「ああ。コレを 明久が着る」

それはインパクトがありすぎる。

「ちょつ……！ お願ひ、許して！ メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだつて皆に認識されちゃう！」

楽しい学園生活の為にも、これ以上の悪い噂は避けたい。たたでさえ無駄に有名人になりつつあるんだから。

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらつ」

「あ、なんだ。良かつた」

「冗談だつたのか。ビックリしたあ～。

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……？」

秀吉がチャイナドレスを持つて溜息をつく。

何をバカなことを言つてゐるやら。たとえ美波が着るのが冗談だとしても、秀吉が着るのは混じりつ氣なしの本氣だ。

「たつだいま～！ つて、なんだ。アキつてばメイド服脱いじゃつたんだ」

「あ……残念です。可愛かつたのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな～」

と、三人娘が帰宅（？）した。人の気も知らずに好き勝手言つてるなあ。あれでどれだけ僕の悪い噂がまた広まつたことか……。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほと世の中甘くないよ？」

にこやかに笑いかける。こちらの見たならこちらのも見せるべきだ。

「そういふことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらつぞ」

モノを逃がさないよう、チャイナを片手に退路を断つ。少なくとも美波は逃げようとするだろうから。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

若干引き気味なエモノ」。けど、残念ながら逃げ場はない。

「やれ、明久！」

「オーケー！ へつへつへ、おとなしく」のチャイナ服に着替え痛あつ！ マジすんませんした！ 自分チヨーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前……」

殴られた腹と頬と腿が痛む。どうして美波は男の僕より攻撃力が高いんだろう？

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？ 前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言つてたと思うけど」

予想通り、美波が渋い顔をする。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

急に雄一に話を振られる。本当は大好きだけど、なんだかそいつた趣味を知られるのも恥ずかしい気がする。  
ここはうまくお茶を濁す程度で「まかそつ。

「大好 愛してる」

「……お前は本当に嘘をつけないヤツだな」

あれ？ 台詞の選択を聞違えたような。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね！」

姫路さんと美波がそれぞれ服を手に取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝つから、あの服葉月にもちょっといい！」

なんて良い子なんだ。美波の妹とは思えない。

「けど、『めんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数

が』

「…………（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーーー！ どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？ つ

てこうかさつきまでいなかつたよね！？」

「…………俺の嗅覚を舐めるな」

なんだろ？ 格好良い口詞のはずなのに、凄く格好悪い気がする。

- - - - - 5分後 - - - - -

「………… できた」

「わ、このお兄さん凄いです！」

神の如き速度で葉月ちゃん用のチャイナドレスが出来上がった。

下心が絡んだムツツリーに不可能はない。

それは知っていたけど、まさか小学生まで守備範囲だったとは。つづく底の知れない男だ。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちょ、ちょっと秀吉ー！」こで着替えるのー？ セーラーと女子更衣室で着替えないとダメだよー！」

純情少年の僕と妄想少年のムツツリーにその刺激は強すぎる。

「…………最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじやが」

「氣のせいだ。秀吉は秀吉だらひ」

「うん。雄一の言つとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思つ。男とか女とかじゃないわ」

「…………俺が言つたのはそつこないといじやない」

あれ？ 違つた？

「んしょ、んしょ……」

「……………！（ボタボタボタ）」

「は、葉月ちゃん！ キミもこんなところで着替えちゃダメだよ！」

ムツツリーーが出血多量で死んじゃつから…」

大量に出血しているはずなのに、鼻を押さえているムツツリーーは心から幸せそうだった。

アドバイスお願いします。

## 平和、そして準決勝。

「たつだいまー」「  
ただいま戻りました~」

お、この声は姫路さんと美波か。助かった！

「丁度良かつたよ。一人とも悪いけど、ホールに回つてくれる?」  
僕らはチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月ちゃんを連れて校舎内  
を歩き回つた。

最初はあまり効果がないように思えたけど、徐々にお客さんが増えて  
いった。

少し時間が経つと、だいぶ席が埋まり始めた。今のところは順調と言  
えるだろう。

「良かつた。段々持ち直してきたのね」「  
良かつたです」

「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」「  
僕はハズレを引いたから知らないけど、皆の反応を見る限り飲茶の出来は相当のものようだ。

段々とチャイナ目的以外のお客さんが増えてきている気がする。

「それじゃ一人ともウェイトレスをやつしてくれる?..」

「はいっ」

「オッケー」

チャイナドレスの裾すそを翻して一人は注文票やペンを取りに行つた。  
これでまたお客様さんが増えてくれるだろう。

「君。注文をしてもいいかな?」

「あ、はい。どうぞ」

そうやって二人の後ろ姿に見惚れないと、近くの席のお客さん  
から声がかかった。

失礼のないよう急いで注文票を構える。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

メモを取り、注文内容の確認の為にお客さんに顔を向ける。……あれ？

この人、教頭の竹原先生じゃないか。また来てくれたんだ。

「ありがとうございます。後ほどお待ちしますので、少々お待ち下さい」

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

「はい。なんでしょうか」

決まり文句を告げて厨房に向かおうとする足を止めて振り向く。

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」

「え？ 吉井明久は僕ですけど……」

脈絡もなくいきなり尋ねられて少し驚いてしまう。

教頭先生が僕に何の用だろ？

「ああ、そうかい。君が 吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思います」

「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である君のことを見井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室でなんて呼ばれているんですか……？」

（馬）って、どう考へても一つの単語しか思いつかない。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなつたから持つてきて欲しい、だつて」

そんなやりとりをしていくと、いつの間にか用意を終えた美波が戻ってきていた。

「ん、わかつたよ。先生、ちょっと行つてきてもいいですか？」

「構わんよ。特に用があつたわけではないのでね」

「？ そつだつたんですか？」

それなら何で僕のことを見ねたんだろう？

教頭先生とは特になにもつながりがないはずだけどなあ。

「アキ、土屋が急いで欲しそうに言つたわよ？」

「はーい」

よくわからないけど、とりあえず用事を済ませるのが先だ。

ストックの置いてある空き教室へと向かおう。

旧校舎の廊下を早足で歩いて目的の場所へ。  
えっと、いくつぐらい持つていけばいいかな？ きちんと数を聞いておけばよかつたな。

「おい」

「うん？」

空き教室の中で考えていると後ろから声がかかった。

声の主は同年代くらいの男三人組。困ったことに勝手に空き教室に入つてきている。

「ああ、ここは部外者立ち入り禁止だから出て行つてもらります？」  
うちの学校では見たことのない顔だから、きっと他校の生徒だろう。道に迷つたのかな？

「そうはいかねえ。吉井明久に用があるんでな」

そう言って、向こうの一人が後ろ手で扉を閉めた。

「へ？ 僕に何か？」

「お前に恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしてくれや！」

言ひやいなや、拳を固めて殴りかかってきた。ええつ？ なんで？

「ちょっと待つた！ 人違いじゃないの！？」

屈んで拳をかわし、立ち位置を入れ替える。

なんだか殴られることが多い避けるのが上手くなってきた気がするなあ……。

「逃げんなコラ！ おとなしくしていろー！」

「いや、そんなこと言われても」

扉側に来たから逃げるのは簡単だけど、それだと喫茶店にこの連中が来てしまう。

さてさて、どうしたものかな。

その時、ガラッと音をたてて扉が開いた。

「オイ吉井。土屋が茶葉の他に餡子も急いで持つてきてくれって言つてんだが」

「あ、一方通行君。丁度よかつた」

「タイミング良く一方通行君が登場。これはラッキーだ。

「あア？ なんなんですかアーこいつらは？」

三人を見て眉をひそめる一方通行君。

「よくわからないけど、一方通行君と喧嘩がしたいみたいなんだ。だから、あとは宜しくね」

「なンだそりや？」

戸惑う一方通行君を教室の中に引き入れ、代わりに僕が廊下に出る。

『 オイ吉井。これは あア、なるほどオ。オマエら余程死にてエ  
らしいなア』

『 コイツどうする？』

『 一方通行？ どつかで聞いた事がある名前だな』

『 気のせいだろ。とりあえずやつちまおつぜ』

『 なア、『オールバーフェクト』って知ってるか』

『 なつ！？おまえが！』

『 気づいた時にはもオ遅いってなア！』

そんな会話を背に、扉を閉めて5秒待つ。すると 「お、覚え

てるつ！」

「てめえの面、忘れねえからな！」

「夜道に気をつけろよ！」

見事な負け犬の完成です。さすがは一方通行君、強いもんだ。

『 一方通行君。あの連中、なんだつたかわかる？』

売れ行きがよくなつたFクラスの妨害でもしに来たンだろ

「あはは。そんな理由で絡んでくるバカはいないよ

「どオだろオな。とりあえず急いで戻るぞ。土屋が待つてゐる

「はいよ」

再び教室に入り、僕と一方通行君は茶葉と餡子を抱えて喫茶店へ

アキセラレータ

と戻つていった。

「久々に喧嘩ア できたのは良かったが、勝手にオレのこと閉じ込めやがつたから後で愉快な死体に変えてやンよ」

「一方通行君！？発言が怖いよ！？え？ほ、本気？う、腕がねじり切れ…あああああ！？」

そんなこんなで一時間が過ぎ

「明久。そろそろ四回戦だ」

「え？ もうそんな時間なの？」

時計を見て時間を確認する。午後一時過ぎ。

喫茶店に夢中になつていてるうちに随分と時間が過ぎていたみたいだ。

「あれ？ アキたちそろそろなの？」

「頑張つてきぐださいね明久君！」

「アキ、勝つてきて」

「女子一人からの声援。ああ幸せだ。でも相手は棄権になつてるんだけどね。」

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』  
パチパチと声援が上がる。くどいようだけど相手は棄権だからね。  
『と、行きたいのですが。相手の選手は一人とも不慮の事故で全身  
を複雑骨折……』

『やりすぎじゃない！？一方通行君！？多分それは『やる』じゃなくて  
『殺る』だと思つてるのは僕だけじゃないはずだ。』

「で、四回戦は不戦勝じやつたと？」

「うん。相手が不慮の事故で棄権したんだ」

正確に言えば一方通行君アカセラレータが殺つたんだけどね

「あの、絶対に優勝してくださいね……？」

姫路さんか上目遣いに覗き込んでくる。「これは凄い威力だ！」

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやつてみせるさー。」「こんなに可愛い姫路さんを転校なんてさせるものか！」

「やれやれ。それなら明日の朝は気合を入れて起きてこいよ。つと。ほう。なかなかに盛況じゃないか」

「そうだね。結構いい感じだね」

我らがFクラスには結構な数のお密さんが入っていた。

「あ！ バカなお兄ちゃん！ お密さんがいっぱい来てくれたんだよー！」

葉月ちゃんが僕らの姿を認めて、店の中からトトトッヒ駆け寄つてくる。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「ん」や～……

頭を撫でると気持ち良さそうに手を細めている。本当に猫みたいで可愛いな。

『お、あの子たちだー』

『近くで見ると一層可愛いなー』

『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いなー』

『』

お密さんたちの中からそんな声があがる。

やっぱりチャイナドレスは男を惑わす効果があるね。

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が

落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

お客様たちの視線がこちらに随分と集中している。綺麗どころ

四人が固まっているのだから無理もない。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

袖がない服だけど、気持ちの問題なのか腕まくりの仕草を見せる

姫路さん。

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為にも頑張りますか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

「…………ワシは一応男なのじゃが……」

「秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

お客さんの夢の為にも、僕らの売り上げの為にも、秀吉には完璧な女子の子でいてもらわないと困る。

ついでに個人的にもそうだと嬉しいというのは秘密だ。

「やれやれ、仕方ないのう…………。あ、いらっしゃいませー！ 中華

喫茶ヨーロピアンへようこそーーー！」

新規入店のお客さんが来た瞬間に秀吉の口調が変わった。

本人の気持ちとは裏腹に演劇魂が勝手に反応しているみたいだ。ありがたいことだ。

「さて、俺たちも突つ立つてないで手伝つか

「ん、そうだね」

僕と雄二も喫茶店を手伝つ為に用意されたエプロンを身につけた。

「それじゃ、準決勝に行つてくるね」

「はい。頑張つてくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからねー！」

「わかつてるつて」

喫茶店の中で動き回ること一時間。いよいよ準決勝の時間となつた。決勝戦は一日の午後に予定されているから、今日の試合はこれまでラストとなる。

「しかし意外だな。翔子が負けるなんて」

そうFクラスの完璧美女と怠惰たいだの塊のコンビが優勝候補の霧島さんのコンビに勝つたらしい。

「今回の作戦は対、翔子&木下姉に向けて作った作戦だ。だが絶対に勝てる。安心しろ」

「アキなら不安だけど、坂本がそう言つなら大丈夫ね。きつちり勝つべきなさいよ…」

「お兄ちゃんファイトですっ」

「あいよっ」

クラスの声援を背に受け、僕と雄一は会場に向かつて歩き出した。

「で、雄一。作戦つてどんなの？」

道すがら隣の雄一に尋ねる。

実は僕も雄一の作戦を知らないので、どういった行動を取つたらいいのかわからなかつたりする。

「今回は俺たちだけじゃなくて、秀吉とムツツリー二にも協力してもらつ。お前はそれに合わせるだけでいい」

「秀吉とムツツリー二？」

そう言えれば、一人ともさつき教室にいなかつたな。

「ああ。あの二人には弱点はないか、付け入る隙はある」

付け入る隙？ 確かに僕も霧島さん相手なら手段がないわけでもない。

でも、相手はフェリスさんとライナくんだ。霧島さんへの作戦が何の役に立つのだろう？

「狙いはフェリス、フェリス・エリスだ。ヤツを利用して一気に形勢を傾ける」

フェリスさん？ 彼女は完璧だから付け入る隙なんて無いと思つけどなあ。

「とにかく気合を入れろ。この戦いに負ければ、お前は大好きな姫路を失う。命が懸かっていると思え！」  
もうすぐ勝負の場となるステージだ。否が応にもテンションが上がる。

「その『大好きな』つてのはやめて欲しいけど、了解！  
絶対に負けるものか！」

会場を前に、一人で気合を入れる。

元よりこの勝負、負けることなんて考えていない。どんな手段を用いても勝ってみせる！

おじいちゃん！

二三九

拳をふりに詰い、僕らは敵のいる方向へと歩みを進めた。

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。どうやら時間ぎりぎりだったみたいだ。

『出場選手の入場です!』

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお客様たちの前に立つ。僕らの向かいからは対戦相手のフーリスさんとライナくんがやってきた。

「はあ、メンドい…」

全てを達観しているような眼で彼は言った。

アドバイスお願いします。

## 誘拐、そして土御門

「なあ、フェリス、ここは棄権しないか  
「しない。今度そんなことを言つたら前の学校の時のようにお前を「  
「ホントにそれはやめてください。へんたいじきじょうきょう変態色情狂とか

そんなことを言いながらステージに上がって来たフェリスさんとライナ君。

彼らには緊張感というものは無いのだろうか。

『お待たせいたしました！ これより準決勝を開始したいと思います！』

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。  
『どうやら時間ぎりぎりだったみたいだ。』

『出場選手の入場です！』

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお密さんたちの前に立つ。

「――試験召喚つ！」サモン

『Aクラス フェリス・エリス & Fクラス ライナ・リュート	保健体育 0点 & 698点
保健体育	102点 & 162点
『Fクラス 吉井明久 & Fクラス 坂本雄一	VS

あれ？なんかフェリスさんが最初から死んでる気がするんですけど。

「ああ、フーリスは問題見た瞬間に顔を真っ赤にして逃げたから。点なんだ」

そんな恥ずかしくなるような問題つてあつたつけ？と、思つたら雄二が秀吉とムツツリーーに合図のよつなものを送つてゐる。なんだろう？

あつ！僕も知つてゐる暗号だーなになに？

「（ムツツリーー。準備は問題ないか？）」

「（…………これくらいの情報操作は出来て当然）」

情報操作？そんなことしてたのか。

「（秀吉、俺が合図をしたら演技を始めや。声は即興で作つてい）

「（合図はどうするのじや？）」

「（俺が頭をかいたらやつてくれ）」

「（わかつたのじや）」

なるほど。声真似が必要なのか。

「（それつて霧島さんと木下さんにも効果がある作戦なの？）」

「（いや、これは応用したものだ。あの一人にとつては効果抜群だ）

「その時、雄二が頭をかいだ。

遠くから、正確に言つとライナ君側から声が聞こえてくる結構な大声だ。

『あそこのだんじ屋おいしかったよねー』

『良かったー。1日限定30食の三色だんじあと3つって言つてたよ』

『ウチらラツキーだつたんだね』

『そうだー店の名前なんて言つんだっけ……』

『ウイーツトだんじ店だよ』

と言つてゐるうちにフーリスさんの顔が真っ青になつていぐ。

そして、ウイーツトだんじ店の言葉を聞いた瞬間に、ライナ君の方を向いた。

「ライナ……」

「な、なんで『ジビ』ませつか？ フエ、フェリス様……」

「行くぞ……」

「はい？」

「ウイーツトだんご店に行くぞ……ライナ！」

「ちよつーおまつー召喚大会はどうするんだよ」

「ライナ、口答えするならお前が変態色情狂だという事を……それを言つた瞬間、秀吉がニヤリと笑う。あつ、今は秀吉（悪）なんだね。

『ライナ君が変態だつて噂ほんとなのかな？』

『マジかよ……あいつそんな……』

『うううう声が入つてくる。それにライナ君は。「だーもう一分かつたよ！ 先生！ 棄權扱いでお願ひします……え？ つてことは。もしかして……。』

『……坂本・吉井ペアの勝利です！』

勝ち名乗りを受け、僕は手をあげて観客に向き直つた。  
けど、観客は冷めた目で僕を見ていた。

そうだよね。召喚獣勝負を見に来たのに、殆ど召喚獣が出てきてないもんね。

「それじゃ、僕らはこれで！」

ペコッと一札し、罵声<sup>ばせい</sup>が聞こえてくる前に教室へと引き返すことになった。

「雄二、ムツツリーは何をしたの？」

「情報操作だ。もつと詳細を言つとライナの知名度を格段に上げた。しかも良い方でな」

「それが何になるの？」

正直言つて何が言いたいのか分からぬ。

「ギャップつてのは良い方でも悪い方でも多大な影響を及ぼす。みんなに良い奴が、あんなにすごい奴が変態色情狂だなんて。ってな。ただ、心酔しちゃつてるライナファンは好感度が下がるよりもむし

ろ上がる。だから、好感度の総合値は変わらないんだ。つまり、ライナの好感度を変えずに勝利出来ちゃう作戦だ」

なるほど、友人の好感度を変えずに勝つ、優しい作戦ね。

下がる人はどん底まで下がると思つてるのは僕だけだらうか。

「ところで姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

この時間は姫路さんや美波や葉月ちゃんは喫茶店でウェイトレスをやつているはずだ。さつき戻った秀吉やムツツリーも仕事を再開しているだらう。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思つんだが……」「

雄一が不穏な言葉を口にする。そろそろ仕掛けてくるってなんだろ？ また例の妨害かな？

「……………雄一」

教室の前まで戻つてくると、ドアの前に立つていたムツツリーが駆け寄ってきた。

「ムツツリーーか。何かあつたのか？」

「……………ウヒトイレスが連れて行かれた」

「ええっ！ ？ 姫路たちが！ ？」

どうしてこうも次から次へと… 本当に何が起きているっていうんだ！

「やはり俺や明久と直接やり合つても勝ち田がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

雄一の弦きが聞こえてくる。直接やり合つて、喧嘩のことじどうか？

だとしたら、僕はともかく雄一に敵うヤツなんてそれはいな。この男は勉強をサボり続けた分、身体を鍛えまくつていたからな。「つてそんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの…？」ビニに連れて行かれたの！ ？ 相手はどんな連中！ ？」

「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」  
「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度俺たちに直接何かを仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよつかいを出してくるか。そのどちらかで妨害工作を仕掛けてくるとは予想できたからな」

どうやら今回はウエイトレスを連れ出すという喫茶店の妨害の方

らしい。確かにそんなことをされては売り上げに影響が出るだろつ。

「なんだか随分と物騒な予想をしてたんだね」

雄一は姫路さんたちに向かが起じるといふことを想定していたみたいだ。

今までの妨害とは違つて、今回の場合はしゃれでは済まない。下手をすると警察沙汰になるといふのに。

「引っかかることが随所にあつたからな」

そういえば、最近の雄一はたまに何かを考える素振りを見せていた。

その時から何か違和感を抱いていたのだらつ。

「……行き先はわかる」

「と、ムツツリーーが取り出したのは何かの機械。

「なにこれ？ ラジオみたいに見えるけど」

「……盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何で持つているのかは聞かないよ

クラスメイトから犯罪者なんて出したくないし。

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かるべくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「その二やついた目つきは気に入らないけど、今回は雄一に感謝しておくよ。姫路さんたちに何かあつたら、正直召喚大会どじろの騒ぎじやないからね」

「……それが向こうの目的だらうがな

「え？」

「とにかく、まずはあいつらを助け出そ。ムツツリーー、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやつてくれ」

「……わかった」

「雄一、僕らはどうするの？」

「王子様の役田は昔から決まっているんだって。」

「茶目つ氣たつぶりの田がひかりを向く。」

「王子様の役田って？」

「お姫様をひらった悪者を退治することだ。」

『さてどうする？ 坂本と 吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしくからな』

『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちはわかるがそういうものないだろ？ 依頼はその一人を動けなくすることなんだから』

『それに今は『反則破り《ルールキラー》』もいる。負ける要素は無いぜ』

『そういうことだにやー』

『でも相手には『無傷無敗<sup>オーバーパーフェクト</sup>』と『正義の味方<sup>スーパーヒーロー</sup>』一いつ名でじじってんじゃねーよ』

ムツツコーーの持っていた受信機から声が聞こえてきた。待て、

『にやー』ともしかして土御門君？

(雄一、この連中つて)

(ああ。黒幕に依頼されたそこらのチンピラだらうな。あと土御門もな)

ムツツコーーに案内されたのは、文月学園から歩いて五分程度のカラオケボックス。そこパーティーームに姫路さんたちは連れて行かれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよー』

聞こえてきたのは美波の怒鳴り声。葉月ちゃんが捕まつているせいでろくな抵抗もできずに連れて来られちやつたのか。

『お姉ちゃん、だつてさー、かつわいいーー!』

『ギヤはははは!』

吐き気すら覚える外道の声は七人分つてどじうだらうか? 上等だ。今すぐ黙らせてやる。

(待て、明久。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムツツリーーがうまくやるまで待つていろ)

(……わかつたよ)

雄二の言つとおり、ここはじつと我慢しよう。もうすぐムツツリ一がなんとかしてくれる。僕らの出番はそれからだ。

『……灰皿をお取り替え致します』

『おー。で、このオネーチャンたちどうする? ヤツちやつていいの?』

『だつたら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー!』

『あつ! ズリー! それなら俺一番ね!』

パーティールームの中からは下品な笑い声が響き渡る。

『あ、あのつ! 葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下せー!』

『だつてさー。どうする?』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな?』

『やつ! も、触らないで』

『ちょっと、やめなさいよー!』

『あーもう。うつせえ女だな!』

『きやあつ!』

ドン、という何かを突き飛ばした音と美波の悲鳴。

その後数瞬遅れて聞こえてきたのは、ガシヤアーンなんていう、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音だった。

……そして、僕の中で、何かがトんだ。

(おー、明久!)

雄二の制止する声がどこか遠くの出来事のようだと思える。

「おじやましまーす！」

とりあえずドアを開け放つて田的の部屋に入ることにした。

「よ、吉井君？」

「アキ……」

身を縮めている姫路さんと、尻餅をついている美波。中では大体想像どおりの光景が展開されていた。

「ハア？ お前誰よ？」

入り口付近に座っていた男が僕に声をかけてくる。そうだね。ま  
ずはこの人からいこうか。

「それでは、失礼して……」

彼の手首を軽く振り、

「死にくされやああつ！」

股間を思い切り蹴り上げた。

「ほこああああつ！」

足に嫌な感触が伝わってくる。相手はその一撃だけで白目を剥い  
て失神していた。

「テメエら、よくも美波に手あげてくれたな！ 全員ブチ殺して  
やる！」

やつたのはどいつだ？ 美波の近くにいるやつか？ それとも：  
…？ まあいいか。わからないなら全員殴ればいいだけだ！

何だろう。意識が鮮明になつていく。相手の動きがすぐスローに  
見える。

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが…？」

「とにかく来ているのなら丁度いい！ ぶち殺せ！」

テーブルを蹴散らし、四人の男が群がつてくる。

「たつた一人で調子くれてんじゃねえよ！」

その時、ドカン！ とドアが開く。

「お客様ア、ちょっとうるせエンで永眠してもらつていいですかア

？」

そんな言葉と共に目の前のチンピラを吹っ飛ばす一方通行君。  
「よう、一方通行。遅いにゃー」

えつ？ 遅い？ いまいち情報が理解できない。

他の部屋からもチンピラが出てくる。おおよそ40～50人だすごい人数だな。

「やれやれ……」この阿呆が。少しばか頭を使つて行動しろつて の  
つ！

「げぶつ！」

向かつてきた相手は壁に叩きつけられていた。

「雄二つ！」

「貸しイチ、だからな？」

ともうひとり入つて来る。つてライナ君！？ 喧嘩なんて出来ないだ  
ろうじ。

「やばい、あいつまできたのかよ」

喧嘩で有名だつたのか！ 知らないけど。

そこで、本物の店員と思われしき人が言つてくれる。

「失礼します」

「「「うつ！」」

土御門君と一方通行君とライナ君アケセラレータがうめいた。知り合いだろうか。

「他のお客様に迷惑ですのでそういう事はやめていただけませんか  
？」

「なんだあ？ てめえオレに喧嘩売つてんの…」

「「「やめる！ … そいつに喧嘩を吹っ掛けんじゃねえ！ …」」

そんなに言つなんて大切な人なんだろうか？ あつ！ あの店員さん囲  
まれてる！ 助けないと！

ガシッ！ と3人に腕を掴まれる。

「どういう事？ あの店員さんを助けないと…」

「いや、吉井。それは違うにゃー。救うのはむしろチンピラの方ぜ  
よ。それより早く島田達を救出して教室にもどるにゃー」

「えつ？ それってどうこつ…」

ダアアアンッ！－チンピラ達が見るも無残な状態で吹っ飛ばされた  
いた。理解したよ。

「そうだね。そうしよう」

全員を救出してFクラスに戻った。え？あの店員さんは何をしたか  
つたつて？僕にもわからないさ。

身体が少し揺れたかなあって思つたら全員吹っ飛んでたんだから。

「じゃあ吉井、俺がなんでチンピラの仲間に居たか教えてやるにや  
ー」

そうだね、ぜひ聞かせてもらおう。

アドバイスお願いします。

「今からとある人物に電話をかけるにやー。オレとその人の会話で何があつたかわかるにやー」

そう言うと、設定をスピーカーにして電話をかけた。

「もしもし？教頭かにやー？」

『ああ、竹原だ』

『すまないにやー。オレがいたにも関わらず…』

『問題無い。他にも策は用意してあるからな』

『次の作戦にも入るにやー』

『いや、君は待機でいい。君は十分働いた。全く、オールサウザンドオーバー全教科完全攻略は何が目的で吉井と坂本を手助けしているのやら』

『見当もつかないにやー。学園長を擁立してるとしか…』

『単に我らの計画を邪魔しているようにも見える』

『まあ、私は召喚獣システムで文月学園に行つてしまつたウチの生徒が戻つてくれればそれでいいのだがね』

うーん、どういうことだろ？意味がわからないや。

『あの腕輪を暴走させれば、学園長は失脚し、ウチに生徒が…』

土御門君がにやりと笑う。

『ところで教頭』

『どうした？土御門』

『今、オレの周りに吉井と坂本が居るんだが…どうするんだにやー？』

『何！？馬鹿が！何をやつている！しかし断片的な情報では手掛かりすら見つからないはず』

『残念。スピーカーで電話してるから企みから何までダダ漏れだにやー』

『くつ！貴様！裏切つたか！だが残念だつたな！バレたところで坂

本と吉井の言葉を信用する奴など数える程しかいない!』

「確かに証言だけならそうかもしれないにゃー。でも、ボイスレコ

ーダーがあれば、話は別だにゃー』

『くそつーどいつもこいつもー。』

「まあまあ、そう<sup>やけ</sup>自棄にならす!』

それを最後に電話を切った。

「話は分かったはずだにゃー』

「ちょっと待つー!詳しい説明はもうやるぞ<sup>ババア</sup>来る学園長に聞いてくれい!』

「学園長がわざわざ<sup>せりふ</sup>こないで来るの?』

「俺が呼び出した。さつ<sup>せりふ</sup>き廊下で会つた時に、『話を聞かせ<sup>ひ</sup>』ってな

「話ねえ……。ダメだよ雄一。一応相手は田上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと』

「用事もクソも……この一連の妨害はあのババア<sup>せりふ</sup>に原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん』

雄一が当然のように告げた台詞は、僕には驚きの内容だった。

「あ、あのババア! 僕らに何か隠してたのか!』

「つてお前は土御門の説明を聞いてなかつたのか!』

そのせいでの姫路たちが危険な目に遭うし、喫茶店の経営は苦

労するし、ここは文句を言ってやらないと!』

「……やれやれ。わざわざ来てやつたのに、随分と<sup>あいさつ</sup>挨拶だねえ、ガキどもが』

声と同時に教室の扉がガラガラと音を立てて開いた。

「来たかババア』

「出たな諸悪の根源め!<sup>こんげん</sup>』

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい? まるで私は被害者ですといった様子で肩をすくめる。』

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツだとは思つてはいたけど、まさか

アタシの考えに気がつくとは思わなかつたよ」

「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思つていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もつと高得点を叩き出すことのできる優勝候補を使えばいいからな」

「あ、そういうばそうだよね。優勝者に後から事情を話して譲つてもらひとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎやん」

「擁立……えつと、確か『支持すること』だっけ？」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかつたのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋つたりなんかしないはずだ。教育方針なんでものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋つたつてこと？」

「そういうことになるな

」「このババア……！」

「あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案？ えーっと」

「科目を決めさせろってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したつてワケかい」

「ああ。めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗つてこない。だが、ババアは提案を呑んだ」

提案を呑んだことは、他の人ではなく僕らが優勝しないと学園長は困るつてことか。改修を渋つたことといい、得点の高い人たちじゃなくて、敢えて僕らに依頼したことには何か理由がありそう

だ。

「他にも学園祭の喫茶店」ときで営業妨害が出たり、俺たちの対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あつたしな。それに何より、俺たちの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だつた。ただの嫌がらせならここまでではない」

アレは本当に危なかつた。ムツツリー二が盗聴器を仕掛けってくれていなかつたらどうなつていたのかわからない。下手をすると警察沙汰だ。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかつたか……すまなかつたね」

と、突然学園長が僕らに頭を下げてきた。あの厚顔な学園長が！「アンタらの点数だつたら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えていたのだろうけど……決勝まで進まれて焦つたんだろうね」

もしかすると、意外と責任感の強い人なのかも知れない。年下の僕らにきちんと頭を下げるなんて、簡単なようでなかなかできる」とじやないのだから。

「さて、じつらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそつちの番だ」

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして、学園長は僕らに真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない！？　どういふことですか！？」

「アタシにとつちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「もう一つというと、『白金の腕輪』とやらか」

「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかつてやつ？」

少し調べてみたけど、白金の腕輪は一つあるらしい。

一つはテストの点数を一分して一体の召喚獣を同時に呼び出すことができる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作ることのできる腕輪。こちちは使用者の点数に応して召喚可能範囲が変わるらしい。召喚の科目はランダムで選択されるとかなんとか。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのぞ」「僕らが勝ち取る？ 回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あのな……。回収が目的だつたら俺たちに依頼する必要はないだろう？ そもそも、回収なんていう真似は極力避けたいだろうし、な

雄一が学園長を揶揄するように話を振る。

「本当にアンタはよく頭が回るねえ……。そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボのものだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになる」

できればということは、最悪の場合はそれも考えていたのだろう。「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

「……欠陥があつたからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長。技術屋にとつて新技術の欠陥は耐え難い恥のはずだ。それを生徒である僕らに明かすのだから無理もない。

「その欠陥は俺たちであれば問題ないのか？」

「そうだ。アンタたちが使うなら暴走が起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけだからね。だから他の生徒には頼めなかつたのさ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

今度は雄一が苦笑いをしている。

「えーっと、つまり……？」

「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』つてのが一番

都合が良かつたってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められてることでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

「説明されないとわからない時点で否定できな」と思つんだが……くつ！ 雄一はわかっているみたいだし、こうなると僕だけがバカみたいじゃないか！

「一つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそつちは吉井専用にと」

「雄一、これは褒められていると取つていいんだよね？」

「いや、バカにされている。物凄い勢いで」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づけ！」

「くそっ！ 直接お前はバカだ、とか言つてくれないとわかりにくい！ これが年の功による会話術つてヤツか！」

「そうか。そうなると、俺たちの邪魔をしてくるのは学園長の失脚<sup>しつきやく</sup>を狙つている立場の人間 他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄一、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「やれやれ、このバカが……。俺たちの邪魔をするつてことは、腕輪の暴走を阻止<sup>そし</sup>されたら困るつてことだろ？ そんな学園の醜聞をよしとするヤツなんて、うちに生徒を取られた他校の経営者へらいしかいないだろうが」

「ああ、そういうことか。雄一も意地が悪いなあ。きちんと順を追つて話をしてくれたら良いのに。」

「『』名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくれにものかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」「ふむふむ、と頷いてみてふと思う。

「あのや、『レッテ カナリマズイ話ぢゃない?』

「そうだな。文月学園の存続が懸かっている話になるな」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんていう問題が起きたら、学校そのものの存在意義も問わることになる

「あ、でも。いざとなつたら優勝者に事情を話して回収したら

僕はズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を追つていいくと、対戦相手は、

「須川君!？」

「それに、Fクラス御剣神哉つて…」

僕がその名前を言った瞬間、学園長の顔色が急変した。

「御剣神哉だつて！？あんの馬鹿！全教科完全攻略のくせにこんな大会に出たら勝負が見えてるようなモンじやないかい…」「どうしたんだろう？

「相手が相手、交渉は無理だね」

「何ですか？やつてみないと…」

「無理だね。理由は話せないが無理なモンは無理だよ」

絶対に無理みたいなだ。何かを知ってるみたいだけど話さないなさいか。

「悪いが、アンタたちにはなんとしてでも優勝してもいいしかないんだよ」

学園長の表情も硬い。事態はかなり深刻なところまで来ているみ

たいだ。

「おやか」んな」とになつてしるとはな

雄一までそんなことを言こ出す。

「本園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起じらないんですか？」

「ううう。一一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起  
きないよ」

「そうですか。それは良かった」

僕らが暴走を引き起こしたんじゃ話にならない。幸い（？）雄一も総合ではまだそこまでの域に達していないし、問題なさそうだ。

「雄一。聞たいことは聞けたし、今日はもう帰るわ」

「やつだな。家に帰つてやる」とあるひ明田も早口しな

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がった

二八

こうして学園祭初日は幕を閉じた。

アドバイスお願いします。

雄一?

「はあ～、疲れたあ～」

帰つて間もなく疲労感と眠気のダブルパンチ。

「すぐに勉強しようと思つたけど一回寝てからやる。ほわあ……」

そのまま睡眠。

その時、明久は奇妙な夢を見た。

- - - - - 夢 - - - - -

そこは城の窓際。

赤いマントを羽織り、上位の騎士のような、関節部分が金に輝く白い甲冑に身を包んだ雄一がいた。

「なあ、俺達つて親友だよな」

そんなことを雄一が言つてくる。それに僕はこいつ返す。

「もちろん。でも親友というより悪友だと思つけどね」

「かつかつか！そりやそうだな」

あれ？雄一つてこんな笑い方してなかつたと思つけどなあ。

「なあ、もしおまえに p1k7b7童 の力があつたらどうする？」

は？今何て言つたの？聞き取れなかつたんだけど。

「ゴメン雄一、もう一回言つて」

「はあ？雄一？誰だそりや」

「え？雄一じゃないの？」

「ん？ああ お前が現代の p1jk w鹿 x p1d sp か

ええと……、ナニゴシャベツテルンデスカコノヒト？」

「そうか、名前も力も覚えてないんだな。じゃあ俺が、お前の名前をお前の魂に刻みつける。いいか？絶対に『聞く』んじゃない。も

し『聞いた』らお前の魂がぶつ壊れちまう。だから、絶対に『聞く』な

そう言つて男は明久の額に手を当てる。

「いいか？お前の名前は……」

- - - - 現実 - - - -

明久はガバッ！と勢いよく飛び起きる。

「僕の名前が……そんな」

明久はショックを受けたように見えたが……

「まあ、中一っぽい二つ名だと思つとけばいいか」

それでもなかつたようだ。

「アキ、おはよ～」

「おはよ～」ぞいります、吉井君」

「あ、一人とも。おはよ～」

学園祭一日目の朝。姫路さんと美波が揃つて登校してきた。

そんな一人に対して、慎重に言葉を選んで話しかける。

「あ～、その……昨夜はぐつすり眠れた？」

「え？　はい。ぐつすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えっと、それじゃ変な夢とかは？」

「ふふつ。吉井君、気を遣い過ぎですよ？」

あう。バレた。けど、暴行未遂なんて怖い目に遭つたんだ。

ショックを受けてないかを心配しない方がおかしいと思う。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」

「そうなの？」

「はい。結局皆無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けてくれますから」

そう言つて、無理のない自然な笑みを浮かべる姫路さん。

「アキというよりは一方通行アカセラレタと店員さんかもしれないけどね」

美波も全然氣にしている様子はない。この二人、凄く芯が強いみたいだ。

見くびつていたみたいで逆に申し訳ない氣分になつてくる。

「元気そつで良かったよ。それで、今朝は特に問題は？」

「…………異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そつか。ありがとう」

秀吉とムツツリーも一緒に登校してきた。

昨日のこともあったので、今日は秀吉とムツツリーに一人を迎えてつてもらつたからだ。

念のために借り物のスタンガンを持たせて。

「これくらいは当然じや。特にワシは昨日役に立てなかつたしのう

……」

「いや、それは縛られていたんだし、仕方ないんじやないの？」

むしろ同情してしまつくらいだ。すいぶん随分とお尻を触られたみたいだし。

「お、今日は無事だつたか一人とも」

奥から雄一が頭を搔きながら出てきた。二人のことはあまり心配してなかつたみたいだ。

ムツツリー二と秀吉がついていたからかな。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君も早いですね」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ……」

眠氣があぐびが出る。全然寝てないから当然だけど

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？」

「相手はFクラス、心配いらないよ」

「そういうことじやなくて、ウチはアンタたちの実力 자체を心配してるんだけど……」

呆れたような美波の台詞。なんて失礼な。

「そんな心配をしている暇があつたら喫茶店の準備でもしてくれ。

ふわあ……」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ こここのところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

いくらなんでもこの状態じや集中力がもたない。

体力には自信があるから、少し寝れば回復するはずだけど。

「そうだったんですか。それならゆっくり休んでください」

「そうじやな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「…………（コクコク）」

「仕方ないわね。起きられそうになかつたら起こしてあげるけど？」「ありがとう。それじや、十一時までに起きてこなかつたら起こしてもらえる？」

「十一時？ 試合は一時からじやなかつた？」

「一番混み合つお皿どきくらいは手伝つよ」

それでも今からなら三時間は眠れる。僕と雄一ならそれで充分だ。

「んじや、その時には俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝ているか

「う。ほわあ……」

口に手を当てながら雄一が教室の扉に手をかける。  
そつか。屋上か。あそこなら後夜祭用の放送機器が設置されてい  
るだけだし、誰にも邪魔されずに眠れるな。

天気も良いし、絶好の昼寝場所だ。

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」「  
少しふらつく頭を押さえながら立ち上がる。  
(やつぱり一緒に寝るんでしょうか……?)  
(間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……)  
去り際に聞こえた会話は忘れる」としよう。夢見が悪くなりそ  
うだから。

## 決勝戦

「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か?」

「大丈夫じゃなくても行かないダメでしちゃうが。決勝戦なんだからね?」

結局、僕と雄二は手伝いを三十分くらいしかしていない。

疲れているだろうから、と気を遣つて寝かせてくれたらしい。

なんだかんだ言つても、このクラスの皆は優しいと思う。

「後で私たちも応援に行きますね」

こちらは今日もチャイナ姿が眩しい姫路さん<sup>まぶ</sup>。

一田田の売り上げが好調なのも、彼女の魅惑の「スチュームが大きな要因の一つであるのは間違いないだろう。

「14Jまで来たんじや。抜かるでないぞ?」

「…………優勝」

「わかつてゐる。試合戦争の時みたいなへマはしないよ。それじゃ、行つてくる」

「やれやれ。耳が痛いな」

秀吉とムツツリー二が突き出した手に軽く拳をあてて、僕と雄二は会場に向かつて歩き出した。

「決勝戦を前に最後の妨害が来るかもしれないって思つてたんだけど、結局何もなかつたね」

「もう小細工が通用しないと諦めたか、俺たちの居場所がわからなかつたか。そんなところだらう」

「そつか。屋上に来る人なんて放送機器を使う人くらいだもんね」

その放送機器だつて後夜祭の時にしか使われないし。

身を隠すにもうつつけの場所だつたよつだ。

「喫茶店の方は秀吉とムツツリー二が警備しているしな」

「あのスタンガン、服の上からでも通電する危険物って聞いたけど  
「ま、死にはしないだろ」

二人に持たせたスタンガンは違法品のような気がしてならない。  
見た目もかなりヤバそうだったし。チラつかせるだけで大抵の連中  
は逃げていくからいいけど。

「あとはもう何もない。ただ勝つだけだな」

「そうだね」

それつきり特に会話もなく、黙々と会場への道を歩く。

「ほほう。随分と観客が多いな」

「さすがは決勝戦だね」

会場を前にドクン、と少しだけ脈が速くなつた。緊張していない  
と言えば嘘になる。

「吉井君と坂本君。入場が始まりますので急いでください」  
僕らの姿を見つけた係員の先生が手招きをしている。

こうして係員をわざわざ配置してることとは、やっぱり決勝戦は  
今までの試合とは扱いが違うみたいだ。

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！　これより試験召喚シス  
テムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスは今まで聞いたことのない声だった。  
もしかするとプロを雇っているのかもしれない。

世間の注目を集めている大会だし、充分考えられることだ。

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください」

先生にポンと背中を叩かれる。

僕と雄二は軽く頷き合つて、観衆の前に歩み出て行つた。

『一年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明  
久君です！　皆様拍手でお迎え下さい！』

盛大な拍手が雨のように降つてくる。随分とお密さんが入つてい  
るみたいだ。きっとこの中には姫路さんのお父さんもいるのだろう。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、一年

生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！ これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

(あの司会、嬉しいことを言つてくれるな)

(だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね)

ここで僕らを持ち上げておけば『試験召喚システムのおかげで、最低クラスの生徒もやる気を出して学力を上げている』とMRできるからかもしれないけど。

どちらにせよこっちにとつてはありがたい。

『そして対する選手も、2年Fクラス所属・須川亮君、同じくFクラス所属・御剣神哉君です！ 皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！』

(雄一、最初に須川君から瀆すよ)

(当たり前だ。須川は学力も操作も高が知れてるが、片方は全くの未知数だ)

同じように拍手を受けながら、一人はゆっくりと僕らの前にやってきた。

「店員さん！？」

御剣は昨日のカラオケの店員さんだった。

「どういう事！？」

「僕、あそこでバイトしてたんですよ。アハハ」と笑う。

「しかも2-Fって…登校してませんでしたよね？」

「はい。出席番号0番ですけどね」

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した』

アナウンスでルール説明が入る。

もう充分に知つてることなので、僕らはそれを無視して須川君に言つ。

「須川君、降参してくれないか？ ここは僕らに勝たせてくれ」

「駄目だ。たとえ明久の頼みとはいえそれはできない」

雄一は御剣の説得に入る。

「あんたは話が分かる人だと思うから聞くが、負け「嫌です」…即答だな、おい」

「安心してください。腕輪が暴走するのは250点以上ですから「何でそんなく」それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！」チツ！」

説明も終わり、審判役の先生が僕らの間に立つ。

「――「試験召喚」」

掛け声をあげ、それそれが分身を呼び出した。

須川君の装備はオーソドックスな剣と鎧<sup>よろい</sup>、だが御剣は違う。漆黒がベースの甲冑。所々に金の装飾が見える。

その上から申しわけ程度に羽織られているフード付きの白いローブ。右手に白銀の長刀を携え、右腰には真紅の小太刀が差してある。そして左手には白銀の銃、両太ももには同色のホルスターがあり、白銀の銃が携帯されているであろうことが見てとれる。

見て分かる通り、かなりの高得点者であることが想像できる。

『Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 吉井明久

日本史 225点 & 402点 □

「「なつ！？」

雄一と須川君が驚いている。

「どういうことだ？ 明久」

「僕にだって分からないさ。ただ、直感で答えたらこうなった」

「…………（ジー）」

くつー見るなあ！ 僕をそんな目で見るなあ！ 僕は断じてイタイ子じやない！！

そんな事を言つてゐる間に相手の点数がディスプレイに表示される。

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮

「「なつ！？」」

なんて点数ツ！――一人合わせても2倍の点数差があるなんて……っ  
！」

でも、やるしかない！！

「明久。あそこまで俺に付き合させたんだ。ここで負けたら承知し  
ねえぞ」

「わかつてゐる。勉強教えてくれてありがとう。それなりに頭いいじ  
ゃん」

試験召喚獣が得物を構える。

「それでは行きましょう」

戦闘態勢になる。

「こぞ尋常に……」

「「「「勝負ツ！――！」」」

## 明久の能力

明久の召喚獣の腕輪が光る。  
バトルフェイズ ブルータイプ  
戦闘状態。蒼炎化

明久がそう呟くと、召喚獣が蒼いオーラのような物を纏う。  
「直感操作」<sup>センスマード</sup> 上昇値を最大に設定  
アビリティアップ  
その言葉と同時に本来の2倍程の速度で飛び出す。  
能力上昇ツッ！！

「ツ！！」

須川は為す術もなく一瞬で間合いを詰められ木刀で一閃。

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮  
日本史 1283点 & 0点』

「雄一！！行くよ！」

「お、オウ」

少し驚きながらもついていく雄一。明久がまた何かを言つ。  
スキルアナライズ  
「能力解析」  
こんな能力が一つも！？

「どうしたんだ？明久？」

明久は少し動搖しながら言つ。

「相手は能力を二つ持つてる。一つは封印。もう一つは次元操作だ  
！」

明久がそう言うのを待っていたかのように御剣は言った。

「大正解。神次元操作！」<sup>ゴッド・オブ・スキル</sup>

御剣の周りの空間が裂けて、そこに白銀の刀を入れる。すると、

「雄一！うしろっ！！」

刃が雄一の喉元に迫る。しかしそれを明久の木刀が阻む。

それを見た雄一は自慢のメリケンサックを構え、御剣のもとへ駆けだす。

途中、手、足、刀が次元の裂け目から伸びてきて、雄一の行く手を阻む。

しかしそれを予測していたかのようにメリケンサックで相殺し、はたき落としていく。

いや、分かつていて。次の手は何か、いや、実際の所はその5手先まで分かる。

そして見える。相手の考えが、その奥の真意が、そして切り札をいつ切るかも。

「パンドラボックス 封印の匣。解放ツ！！」

それと同時に雄一は御剣と戦っている明久に聞いた。

「あれの効果は分かるか！？」

「封印だよ！選んだものをその箱の中に封印して、操れる能力だ！」

「ありがとな！！」

「どういたしまし てえ！！」

言葉とともに木刀を振るう。避けられるが気はそらせた。

「今だああ！！！」

雄一は御剣がもつ箱から黒いナニカが現れる雄一はそれに向かって拳を振るう。

「それに当たると封印されちゃいますよ」

「知つてらあ！！！」

「ただ、黒いナニカは切られた。いや、斬られた。蒼い光によつて。

「完全蒼炎化ツ！！」

纏うオーラはさらに激しくなつていた。雄一は迷うことなく拳を振るう。

それだけならダメージは少ない。それだけなら。

「チャージOK 装填完了。対象、坂本雄一。吉井明久。行くよ雄一！」

「来い！明久！」

「ヘルブルチャージング 蒼炎装填、最大出力」

雄一にもオーラが移り、激しく燃える。

「『凝縮』」  
〔コントンセイショウ〕

明久は木刀が、雄二は拳が、まぶしい程に蒼く輝く。

「間にあわないッ！！！」

「吹っ飛ベエエー！！！」

腹に木刀が刺さり、顔面に拳が当たる。そして

「解放！」  
〔リリース〕

青い閃光が会場を包む。しばらくすると光が收まりディスプレイの表示が見えるようになる。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

日本史 0点 & 3点』

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮  
日本史 0点 & 0点』

』

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いよいよしあああーー！」

全身が激しく痛むし、吐き気だつておさまらない。しかし明久は最高の気分を味わっていた。

「お兄ちゃん！ すっかり格好よかったよー。」「ぐふーーは、葉月ちゃん……。今日も来ててくれたんだ。どうもありがとう！」

授賞式と簡単なデモンストレーションを終えて教室に戻る途中、凄い勢いで葉月ちゃんが飛びついてきた。わざわざ迎えに来てくれたみたいだ。

身長差で頭が鳩尾に直撃しだけど、ヒーヒーお兄さんのプライドでグツと我慢だ。

「一人とも、お疲れ様。凄かつたわね」

「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いです～っ！」

「葉月つてば。アキが困ってるわよ？」

美波が僕にグリグリと頭を押し付けている葉月ちゃんを見て苦笑している。

これ以上鳩尾を圧迫されると致命傷（めいじょう）になりかねないので、やんわりと彼女の身体を遠ざける。葉月ちゃんは不満げな表情を浮かべながらもおとなしく従つてくれた。

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた？」

「はいっ！ とっても素敵でした！ 今度土屋君にビデオを『ペー

してもらおうと思つくらい！」

目がキラキラと輝いている。

こんなに嬉しい反応をしてくれるなんて、頑張った甲斐があるとうもんだ。

「ビデオねえ……。ムツツリーーー、撮影なんかしていたの？」

「はい。ずっと熱心に撮つっていましたよ。ね？」

「…………（ブイツ）」

目を逸らすムツツリーーー。

この男、さては試合そっちのけでミースカートの観客とかを撮影していたな？

終了。

中途半端ですが。続ける事が難しくなってきたためこれを以つて最終回といたします。

読んでくれた皆様ありがとうございました。

他にも連載作品があるので、そちらも見てくればありがたいです。この後の展開は、『常夏コンビは再起不能になり、襲撃はせず。街の復興が一通り完了したため、一方通行、他3名は帰ることになり、御剣神哉さんは一方通行達とともにどこかへ。で、明久達は、の人たち何だったんだろ?』的な感じで終わりです。

『愛読?ありがとうございます。』

red starを、今後よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6750v/>

---

バカと昼寝男と超能力

2011年10月15日14時52分発行